

小野福平著

催眠術治療精義

全

明治

28 4 25

内交

發行所 大日本催眠學會

自序

催眠術は諸種の疾病殊に神経系に屬する疾病に應用爲し效果の顯著なることは既に内外専門學者の是認する處且つ文明諸國の定論なりとす本邦斯術の著述乃至翻譯の例に乏しからず著書の出現は爾來益々多からん事著者之れを望む然れ共從來の著書を閱するに斯術施行上一大眼目とする處の疾病治療に就て之れを統一的に論述せし物未だ在るを知らず實際治療の效果を確實に修めんとすれば其疾患の何ものたる事を知解すべき素要を備へざるべらかざる哉必然なり夫れ之れが知能なき者の治療は或は危険に非ざるやとの杞憂は常に醫學者の間に在り加之社會も亦多少此點に懸念無しとせず是れ順然生ずべき問題なりとす蓋し斯術を眞面目

に研究爲さんと欲する者又之れを施行爲しつゝ在る者は既に其必要を悟り予の許へ著書の推薦を乞ひ來る者甚だ多し然れ共甲は複雑にして學理を攻究する専門家の用に適すると雖も初學者の目的に應ぜず乙は簡短に失して其意味を盡されず未だ以て推薦すべき適切なる良書の見當らざるにあり去りとして亦研究者諸君の志望を充たざるも遺憾なりき爰に於て止むなく諸大家の説を斟酌し終りに聊か余の意見と經驗を叙述し以て其責任を免れんとす然れ共余は淺學にして到底讀者諸君の満足を期すること能はざるなり請ふ之れを諒とせよ若し本書が斯學の爲め些小の益在りとせば著者の幸甚是れに過ぎざる所とす

明治三十八年四月

小野福平識

緒論

總て治療を施さんとする者は先づ其對象たる疾病其物を知解せざる可からず此準備なくして治療を人に施さんとするは恰も土臺無くして家屋を築かんとするも同様なり本書は此危険なからしめん事を期し以て一方に於ては催眠治療の眞價を益々發揮せしめんが爲めに叙述したるものなりとす蓋し古代に於ては是を行ふ者の多くは宗教家に在りて而して彼等が疾病に對する見解は神罰又は惡魔の所業に由るものとして祈禱或は禁厭に由りて治を得たるものなりとす爾來疾病に對する見解は世の變遷に伴ひ幾多の段階を経終に今日の發達を見るに至りたるものなりき此間に於て行はれたる治療法を近世のものに比すれば幼稚と謂はんより寧ろ無意味なることの多きに在り然るに其効果を奏したるは是れ一種不可思議なる現象ならんされど是れ必ずしも不可思議に非ず其効果を奏したる所以は他なし即ち心的作用にして所謂暗示療法が知す識すの間に於て行はれたるに由るなり果して然らば疾病其物を知解せざると雖も治療を施すに何等危険のなきものなり又其事實も未だ多く現れざるに在り之れに由りて是れを觀れば

疾病現象を知解すべき専門的知識の必要は蓋し那邊に在る乎是れ俗的催眠術家及び半識哲學者の唱る愚論なりとすされば少しく批評的思想を以て之れを考察する時は其非なることは自ら悟了するに至らん何んとなれば近世理化學發達の影響として臓器の所在、作用、變狀等は殆ど説明され盡し居れり此明瞭確實なる學理に據らずして想像判斷を以てするは是れ即ち愚と謂はずして何んぞや

苟もことの成功を期せんと欲せば其準備無くして可ならん況や人の疾病を治療する上に於てをや手段方法の如何に宜しきを得たればとて其順序を誤る時は常に無効に止まるのみならず反て稀れには有害となること無きに非ず例之十二指腸、巨口蟲性腦貧血、腐骨性疼痛、結核性等の疾患に對し常に症候的治療を施したればとて何の效やあらん其他萬病少なくとも此例に倣ふものなり故に治療を人に施さんと欲せば先づ疾病の原因及び状態を會得するの知識を有せざるや必然なり人此點を看過するに於ては到底治療の完成を期すこと能はざるなり

既に述記せし如く苟も治療を施さんとする者は病理を解する知識を養成するは蓋し社會に對する義務亦自己の職責なりとす然れ共本書に在りて此多種複雑な

る病理の全般を紹介し盡すべきものに非ず本書は即ち催眠療法に適應したる疾病の主たるものを敘著し初學者の參考に供するを以て目的と爲すが故に或は短に失するの嫌無きを保せず此點は前以て謝し置く所なり

疾病とは何んぞや 是れ治療を施さんとする者の第一に研究すべきこと也曰く疾病とは一定の原因に由りて生ずる生理生活の變狀是れなり

即ち生活體內臟器組織の細胞に一定の刺戟を受け此刺戟に對する反應を呈し而して此反應は細胞夫れ自身に一定の變狀を起し其變狀したる細胞と關連したる官能に變調を來たし以て組織的生活現象に異常を呈す之れを疾病の本態とす諸疾病を體別して左の二種とす(甲)器質性疾患(身體機關の變狀著明にして且つ病原の明かなるもの)(乙)機能性疾患(神経系統の變狀に在りて病變至微至細にして未だ其病因の知れざるもの而して病變の殊に著しきもの)

催眠療法の直接効果を修むるものは即ち乙症にあり故に本書は乙症に就てのみ敘述したるに在り

治療とは何んぞや 是れ第二に研究すべきことなり

疾病を治癒若しくは輕解或は緩解爲さしむる手段方法は是れなり
 即ち醫術按摩、電氣、溫泉、海水、鍼術、灸、運動、轉地、空氣、飲食、光線、但し病態に在る者其他
 祈禱、禁厭、神水等是れなり
 之れを體別する時は(甲)理學的及び化學的治療、(乙)精神的若しくは心理的治療と稱
 す而して催眠暗示療法は精神的若しくは心理的治療に屬するものなり
 苟も人の疾病を治療せんとする者は總ての病理を知解すると共に亦總ての療法
 も心得居らざるべからず如何に興味ある學理に基き複雑なる手數を要したりと
 て實際其效顯無き時は治療の目的に添はざるなり故に理化學的治療を主とする
 者に在りても精神的治療を併用せざるべからず亦精神的治療を主とする者に在
 りても必ず理化學的治療を併用し以て其目的に到達することを近からしむるに
 努めべざるべからざるものなり
 本書の本領は前述の如く病症、病變及び病因と病變の關係を論じ併て治療法の一
 斑を講ずるにあり

著者識

催眠術治療精義目次

緒論.....一

第壹編 病理概論.....一

第壹章 進行性疾患.....一

 第壹節 肥大.....一

 第貳節 增生.....三

 第參節 再生.....四

第貳章 退行性疾患.....五

第參章 變性.....七

 第壹節 脂肪變性.....八

 第貳節 粘液變性.....一〇

第四章 局所循環障害.....一〇

 第壹節 充血.....一〇

第貳節	鬱血	一一
第參節	貧血	一三
第五章	病原論	一五
第壹節	内部原因	一五
第貳節	外部原因	二〇
第參節	創傷	二三
第肆節	火傷	二六
第伍節	凍傷	二七
第陸節	藥物中害	二七
第柒節	寄生蟲	三〇
第貳編	暗示總論	三一
第六章	暗示	三一
第七章	暗示の分類	三三
第八章	暗示感受性	四一

第九章	暗示感受性と暗示の強弱	四七
第參編	暗示奏效の理由	五一
第拾章	暗示能力	五二
第壹節	自發注意	五三
第貳節	他發注意	五六
第參節	注意の病態	五七
第拾壹章	感情	六二
第壹節	激感	六四
第貳節	苦痛	六五
第拾貳章	本論	七一
一	疼痛	七二
二	出血	七三
三	貧血	七六
四	腦充血	七七

五	脊髓癆	七七
六	脊髓炎	七九
七	三叉神經痛	八〇
八	痙攣症	八〇
九	癲癇	八〇
十	舞蹈病	八一
十一	癲癇	八一
十二	神經衰弱	八一
十三	歇私的里	八二
十四	喘息	八二
十五	痙咳	八二
十六	急性胃加答兒	八三
十七	胃擴張	八三
十八	胃痛	八四

十九	佝麻質斯	八四
二十	脚氣	八五
二十一	月經閉止	九二
二十二	月經過多	九二
二十三	月經困難	九二
二十四	月經痛	九二
二十五	交接痛	九三
二十六	陰莖萎縮	九三
二十七	早漏	九三
二十八	遺精	九三
二十九	遺尿	九三
三十	近視眼	九四
三十一	遠視眼	九四
三十二	斜視	九四

第四編 病理各論及び一般治療法並に暗示法……………九五

第拾參章 腦疾患……………九五

腦出血 卒中……………九五

腦貧血……………一〇六

腦充血……………一一〇

第拾四章 脊髓諸病……………一一三

脊髓及び脊髄膜の出血……………一一三

脊髓炎……………一一五

脊髓癆……………一二一

第拾五章 末梢神經疾患……………一二七

神經痛總論……………一二七

三叉神經痛……………一三一

偏頭痛……………一三二

頸後頭神經痛……………一三四

膊叢神經痛……………一三五

横隔膜神經痛……………一三五

肋間神經痛……………一三六

乳房神經痛……………一三七

腰叢神經痛……………一三七

坐骨神經痛……………一三八

第拾六章 痙攣……………一三九

顔面神經痙攣……………一三九

職業的神经障害 書痙……………一四〇

テタニー……………一四二

アラト―セ……………一四三

第拾七章 痲痺……………一四四

顔面神經痲痺……………一四五

三叉神經運動痲痺……………一四六

舌下神經痲痹	一四七
鋸筋痲痹	一四七
知覺鈍瀰 知覺異常 疼痛缺亡	一四七
舞蹈病	一四九
大舞蹈病	一五一
癲癇	一五二
神經衰弱症	一五六
歇私的里	一五九
呼吸器病	一六四
喘息	一六四
瘰咳	一七〇
消化器病	一七四
急性胃加答兒	一七四
慢性胃加答兒	一七八

胃擴張	一八二
胃痛	一八四
腸加答兒	一八七
盲腸炎 盲腸包膜炎 盲腸周圍炎	一九二
全身病	一九四
急性關節痲麻質斯	一九四
慢性關節痲麻質斯	一九八
筋痲麻質斯	一九九
脚氣	二〇一
生殖器病	二〇五
月經閉止	二〇五
月經過多	二〇八
月經困難	二〇八
月經痛	二〇九

交接痛	二一〇
陰萎	二一一
早漏	二一二
遺精	二一三
夢精	二一四
遺尿	二一五
第貳拾四章 眼諸病	二一七
近視眼	二一八
遠視眼	二二二
夜盲	二二四
網膜知覺鈍癱 晝盲	二二五
色盲	二二七
斜視	二三三

催眠術治療精義目次終

催眠術治療精義

小野福平著

第壹編 病理概論

第壹章 進行性疾患

進行性疾患とは身體組織の増生若しくは新生を來すべき病變を指すものにして之れを類別する時は即ち肥大増生再生の三機能とす

第壹節 肥大

肥大を區別して二種と爲す甲は全身の發育旺盛にして即ち軀幹長大筋骨異常に發育せる者力士の如き者又作業性肥大と稱して一局所の肥大せる者勞働者の手足或は鍛冶の手腕の如き者等なり乙は病變にして心臟肥大腎臟肥大關節炎に罹りたる後ち骨の肥大其他一切臟器

の異常なる肥大是なり而して此所に於ては乙即ち病變現象を論述するに在り其原因と見做すべきものは次の如し
 一部營養吸收作用の増生(心臟肥大に往々觀ること有り)或は一部營養吸收作用の缺如(隻腎の缺如後に於ける他腎の肥大肉腫、癌腫、結石等に由りて狹窄したる其周圍に將來する肥大)此等は概して調節性若しくは代償性肥大と稱す此現象は有機體生存上必然なる生活反應なりとす

ウイルヒョウ氏の細胞病理に由れば細胞の肥大は營養的刺戟の亢進に伴ふものとすコォーンハイム氏の説は血管に重きを置きたり其何れの説に由るも肥大とは細胞容積の増大若しくは増生に歸着するものなり而して病的新生機能に在りては主として一定の成分のみ増殖し以て新組織を成し其舊組織の形狀を失ふを常とす又再生機能の完全なる者に在りては生理的再生現象に於けるが如く組織新生の行はるゝこと恰も病的新生と同じく細胞數の増殖に因するなり然れ共開

は缺損を補ふに止まり即ち略ぼ舊組織の形狀を保維するものとす
 以上記する所は唯主要なる區別を掲げたるものにして決して斯くの如く單純なるものに非ずして往々同時並び存すること有るなり

第貳節 増生

組織の缺損を補ふ爲めに組織新生機能を有するは動植物に共通したる現象なりとす而して病的結締組織新生或は腫瘍新生等も均しく此の細胞増生機能に由りて行はるゝものなり

細胞増生は如何にして出來得べきものなるやの問題に就ては左の二説あり

(甲)自然發生説

(乙)細胞分裂説

甲は古説にして今日の學者之れを採らざるなり乙は漸く信憑するに足るものにして殊にストラスブルゲル、フレミング以來確實に證明

せられ一般に是認する所となれり

第三節 再生

再生現象とは缺損を生じたる場所に於て其周圍に遺存せる舊組織の新生するを謂ふなり(但し一旦死したる組織の再生するに非ざるは勿論なり)而して生理的再生現象に在りては缺損大ならざるが如く隨て再生も亦人の注意を惹くに至らず之れに反して病的再生に在りては缺乏通例屢々大なるが故に再生の行はるゝも亦顯著なり即ち骨傷後の骨組織、皮膚切傷後の皮膚結締織等の再生に於けるが如く蓋し何れの場所に在りても缺損大にして舊組織再生のみを以て補充し能はざる場合に於ては新生結締織の之れを補綴するを例とす
此の現象の行はるゝは主として舊細胞の間接的核及び細胞分裂に由來す而して組織の單純なる者若しくは下等動物等に在りては漸々著明なり是れ下等動物の能性なりとす

第貳章 退行性疾患

退行性疾患とは官能の減殺を來すべき組織の萎縮是なり而して組織の諸變性或は浸潤及び沈着等の起來又は進行性病變之れが原因となることあり蓋し何れに在りても萎縮は組織の容積を減するものにして是れ容積増大の肥大に於けが如く萎縮は其反對現象なり而して斯現象は原因の如何に抱らず營養成分の缺如に伴ひ組織の縮小及び消失を將起す然れ共其病的に非ずして即ち生理的に在りても亦萎縮を催起することあり例之老人期に於ては頭髮の脱落、皮膚皺贅、生殖器腺、骨質の破碎し易く此等は皆な病的萎縮と認むる可からず而して通常其原因に隨つて萎縮を分類する時は即ち

(一)不働作性萎縮 (二)壓迫性萎縮 (三)營養不良に因する萎縮 (四)神経性萎縮

(一)不働作性萎縮に在りては屢々筋組織に於て見ること著明なり例之

病床に久しく臥したる者の走行跚蹠或はギブス繃帯又は牽引繃帯を久時施し居たる者の骨折側に於て見るが如し

(二) 壓迫性萎縮とは腫瘍或は膿胞の爲めに壓迫を被り其接近せる組織の萎縮に陥り或は人工的に單純なる固定壓迫に由るもの是れなり例之胸部大動脈瘤の發生するや胸骨體に萎縮を將來し甚だしきに至りては骨質の陥凹を生ず又支那婦人の足の如きも蓋し此例なり壓迫は其局所の營養不良となり漸次組織の萎縮變性を來すが爲めなり

(三) 營養不良に基因する萎縮は熱性病或は消耗性疾患後に於ける凡ての萎縮是れなり

(四) 神經性萎縮即ち半身不隨或は脊髓疾患等に因する神經痲痺に陥れる末梢上下肢の筋組織皮膚皮下結締組織等の痲痺狀私的里依ト昆涇兒等に於ける不足性痲痺若しくは癩病性神經周圍炎後に於ける萎縮是れなり

其の他諸炎症後に於ける組織の萎縮此等は變性に算入す可きものとす

第三章 變性

變性とは即ち局所組織の死なり而して其死中迅速に行はる、者と徐徐にして尙諸種の變化を呈する者とありウイルヒョウ氏は之れを區別して前者を壊死即ち直接的組織の死後者を間接的組織の死即ち變死と名けたり然れ共該現象中組織必ずしも死を期せざる者在るを以て單に退行性疾患と名目すべからざるものとす

此現象は名稱の如何に抱らず一定の組織の變化を現はせるものにして諸熱性傳染病乃至磷砒石等の中毒症の經過中に於て往々腎臟肝臟等の如き腺の實質を形成する細胞若しくは心筋其他纖維の腫脹し夥粒狀溷濁を呈するものなり

此變性の主徴は細胞内に多數の夥粒を發生するに在り該夥粒の形狀

如何は顯微化學上に由りて明なりと雖も複雑に互るを以て爰に省略す而して之れが原因に就ては種々の説ありと雖も細胞病理書に由れば即ち營養的刺戟に對し細胞の營養液攝取官能は増進す然れ共類化作用は之れに伴ふこと能はず即ち類化せられざる蛋白質は膠粒として細胞體內に沈澱するが故なりと説く

第壹節 脂肪變性

脂肪變性は之れを溷濁腫脹に比すれば變性の度更に數等に進めたるものにして脂肪變性に陥りたる細胞は終に死所謂間接的壞死を致すものなり

斯現象の類例を記せば其最も著明なる者は妊娠後より分娩後産兒哺乳期の間に行はる、(生理的)乳腺細胞の脂肪變性又は子宮壁の分娩後の脂肪變性其他皮脂腺の如きは一生涯漸えず各時期に於て脂肪を分泌し以て皮膚をして滑澤ならしむ又眼球に於ける老人弓の如きも該

部組織の脂肪變性に外ならずと謂ふ

脂肪變性發生の理由に就ては諸家各説を異にせり或は細胞内の小球は細胞内即ち其局所に於て發生したるもの(脂肪小球として他より滲潤したるものに非ざるもの)と營養輸入減少とが組織細胞の營養障害を催起し終に營養變性を將來するものと説き或は通常細胞内に於て行はる、脂肪酸化作用の減弱に因すると説き或は細胞内脂肪生成増生に由ると説く右の内前説は漸々信憑するの價値を有す

病的脂肪變性に在りては諸種熱性傳染病或は中毒症(磷、砒素、酒精、クロロフォルム、エーテル、ヨオドフォルム、酸、硫酸、硝酸等の經過中腎の紆曲細尿管細胞乃至肝細胞の脂肪變性、心筋乃至軀幹筋の蔓延性或は斑點狀脂肪變性、其他一般乃至局所の貧血に因する脂肪變性及び炎性、新生物に由りて細胞組織の脂肪變性を將來す而して中毒性脂肪變性は酒客に於て往々見るところなり

第貳節 粘液變性

粘液變性は細胞及び間質共に之れを呈するものにして臍帶組織、胎生兒の皮下組織及び眼の硝子様液は其間質に於ける諸粘膜消化器、呼吸器生殖器粘膜等の細胞分泌液は細胞夫れ自身に於ける生理的粘液變性の模型なり

病的に在りては右粘膜乃至粘膜腺を有する管の加答兒性炎に罹る時の如き粘膜の分泌増盛の際或は腫瘍中殊に結締質部類に屬する腫瘍(軟骨腫、肉腫、纖維腫の如き)及び肉被細胞腫等の間質の粘液變性等なり

人、粘液變性の影響たる粘膜の加答兒慢性となるや往々粘膜の萎縮を將來することあり

第四章 局所循環障害

第壹節 充血

充血を別ちて動脈性充血、虚性充血、靜脈性充血の三種とす、動脈性充血を呈する臟器組織は小動脈管の怒張乃至毛細管の充實に由りて紅色を呈し、體の表面に在りては往々搏動を觸知或は視覺することあり又溫度も他部に比して少しく昇騰することあり而して動脈性充血は唯生前に於て經驗すべく死後に於ては動脈管收縮の爲め動脈管内の血液は悉皆毛細管及び靜脈へ輸送せらるゝを以て之れを見る能はず而して之れが主なる原因は左にあり

- (一) 神經性血管擴張(血管收縮神經痲痺、血管開大神經の刺戟迷走神經壓迫、切斷乃至交換神經の刺戟、半面頭痛、感動的紅潮)
- (二) 溫度に因る血管壁の弛緩(入浴後の如し)
- (三) 血管自個の器機的及び化學的電氣的刺戟の爲め
- (四) 血管に加はれる壓脱却乃至減少後
- (五) 血行一時閉塞したる後再び舊に復する時
- (六) 炎性現象の前驅として

以上は特異性充血と稱すべきものなり此他代償性乃至吻合性充血と稱す可きものあり即ち一局部に貧血を生じたる爲め他の組織に於て來る充血乃至吻合動脈を有する動脈管閉塞後其閉塞上部より發する分派吻合動脈管の擴張に因する充血是れなり

而して生理的一定の臟器組織が固有官能を營爲しつゝある間は動脈血の輸入之れを休息時に比すれば遙に大なりとす之れを官能的充血と稱す全身血液の量は常に略ぼ一定なるが故に其原因の如何に拘らず充血は一定度迄吻合性充血と認めざるべからざるなり

第貳節 鬱血

鬱血は靜脈管内血液の充漲にして前路抗抵の増加に由るものなり又往々血壓の減殺も之れが原因と爲ることあり(動脈管内血壓の減少)而して此場合に於て心臟を去る最も遠隔の部分乃至下垂部に於て現はるゝ小循環器系統若しくは全身諸臟の鬱血は殊に心僧帽瓣口の狹窄

及び閉鎖不全其他肺患に於て之れを見る脾胃腸粘膜の鬱血は心臟瓣膜病の外殊に門脈系統の血行障害に因す而して屢々腫瘍其他靜脈管の壓迫も亦素因を爲すことあり

第參節 貧血

局所貧血は動脈管の或は外部より壓迫せらるゝか或は管壁の肥厚に因するか凡て管壁の狹窄となるが爲め血流に對する抵抗力の増加に由るものとす即ち外部より壓迫(人工的には結紮病的には腫瘍炎性滲出物等管壁の肥厚硬變等)其他異物の管腔を填塞狹隘ならしむる場合或は筋層の攣縮(脚氣症に屢々之れを見る)等に在り而して貧血に陥りたる臟器組織は肉眼的蒼白を呈し組織液及び血液に乏しきを以て多少其容積を減じ之れに觸るゝに冷やかにして弛緩し久時持續する場に於ては組織の單純萎縮或は貧血性壞死或は脂肪變性に陥るが爲めに全臟器組織縮小し表面皺襞を現はす者あり唯輸入動脈の吻合動

脈を有する時は代償性充血に由りて臓器の萎縮變性を免る、者なり。血液の循環が正規に行はる、は心臟の「ポンプ」作用（壓出及び吸引）と血管壁が有する弾力及び收縮力とに依る即ち大循環系に於ては左室壁の收縮に由りて動脈血は大動脈管腔に向つて驅逐せられ大動脈は其壁の弾力に由りて開大し左室伸暢の際大動脈内の血液は大動脈壁が再度舊狀に復せんとして内容を壓迫するを以て血液は前後何れにか流動せざる可からず然れ共大動脈口に於ける半月瓣の閉鎖は其逆流を許さざれば勢ひ前進す次期左室壁收縮に際して同量の血液は同前の壓を得て大動脈管腔内に進入し來り之れを開大せしむること始めの如く續て左室の擴張するや大動脈壁舊狀に復せんとして内容を壓迫すること亦同じ斯の如くして血液は波動をなし動脈管に向ふ而して其漸次心臟を遠ざかるに隨て大動脈壁の弾力は大小動脈細動脈管に壁の收縮力と漸々其位置を換へ由つて以て血壓を維持す是れ動脈管が單純の護謨管とは同じからざる所以なり（血流は毛細管に近づく

に従ひ漸次其速力を減すと雖も毛細管を通過する上に於ては差支無き壓力を有するなり若し然らざる時は次第に分枝を生じ細狹となる血管全壁の摩擦に由り即ち抗抵のみ増大し速力は全く滅盡し末端動脈管内血行の停止を見るに至らん而して毛細管を経たる血流は前路に抗抵少き靜脈管内に流注し茲に於ては血液の前進主として呼吸運動（呼吸の際）及右心室の伸暢（吸收作用）に由りて營爲せらる四肢關節屈曲部之れを補ひ伸暢の際吸引し屈曲の節中樞に向つて血液を壓す諸所の瓣膜装置は血液の逆流を防ぐにあり

第五章 病原論

第壹節 内部原因

凡そ吾人の生活は外來無數の刺戟と之れに對する臓器組織の反應に由りて現出せる諸現象の綜合に外ならざるはなし而して疾病も亦之れを表現する所の機能たるに過ぎず病的現象に在りては之れを生理

的官能に比して或は亢進或は減衰を呈し其調節を缺ぐ點に於て數量上の差有りとも雖も性質上に於て差別無なきものとす左れば吾人日常の慣例的刺戟の外即ち違常なる刺戟又は過大なる刺戟等に遭遇することの久しきに互る時は漸々組織に變化を來すや勿論なりとす此組織變化状態の異大なるものをして吾人は疾病と稱するの外他に何等意義をも認めざるべし蓋し各人とも同等の刺戟に對して同一の反應を呈するやと謂ふに決して否らず其者の精神及び身體の境遇習慣性質年齢男女營養等に由りて自ら千差萬別にして必ず一定せず例之大酒家は多量の飲酒を爲すと雖も僅かの興奮に止まるも下戸は一盃の酒若しくは奈良漬の香の物を喫して已に酔へり甲は寒濕の空氣中に在りて何等異常なきに乙は忽ちに感冒し赤痢虎列刺等の流行時に際して稀には健康者の糞便に細菌を認むること有り即ち同一の刺戟に對して其反應を異にするは何人も均しく知る處なりとす

斯の如く同一の刺戟に對して抗抵に強弱在り而して抗抵の弱き者は

之れを素因有りと爲す、病毒に感染し易き者は所謂感受性を有するにあり、病毒に感ぜざるものは之れを免疫性を有すと爲す、數回の種痘を施すと雖も感受せず又天然痘流行に遭遇するも感ぜざる者は天然痘に對する先天性免疫性を有する者にして一回の麻疹に罹りたる者一回の痘瘡に罹りたる者の再度同病の傳染を被らざる者は是れ一回の感染に由りて免疫性を得たる者なり、其他種痘に依り乃至人工的病性を減弱せしめたる病毒の移植に由りて得たる免疫性は之れを人工的免疫性と名く、又之れに反して一度一病毒に感染したる後屢々同病に侵襲せらるゝ場合あり例せば間歇熱、脚氣、痲瘋質、斯等然れ共此等は一度病に罹りしが爲めに同疾病に襲はれ易き素因を作りたるものにはあらずして寧ろ其個人の境遇或は生活状態が會々同病の原因をして身體に働き易き機會を與へたるものと謂はざるべからず、概近一定の病毒に對して免疫性を有する動物の血清を感受性を有する動物の皮下に注入し若しくは免疫質動物の乳を感受性動物に飲用せしむる

時は後者も亦免疫性を得べしと主張する者有り既にベーリングの血清療法は之れを實扶瑗里患者に用ひて好結果を呈せるは一般の認むる所なれば右の血清も亦注意すべきものなりとす

特異性とは何んぞ例之一定の食品蟹蝦、蝟、乃至藥物沃度劑水、銀劑等の如きに對して若しくは枯草の香を嗅ぎたるのみにて皮膚に諸種の斑紋を發し或は不快感を覺ゆる者其他個人特異なる現象是れなり

特異性とは即ち臟器組織の一部或は全部が一定の病變を起し易き感受性を代表したるものなり以上の外恰も父母の性質が子孫に再現するが如く一定の疾患が屢々一家族内に遺傳する者あり例之精神病、癲癇、舞蹈病、癩病、肺結核、歇私的里、腦病其他神經系病等の如きは殊に著明なりとす而して遺傳性素因を有する家族の子女等は往々同病に罹りたる父若しくは母或は祖父母等が該病を患ひたると殆ど同年齡に於てすることあり

精神病の遺傳素因を有する者は不平、失望、落膽、困迫等に遭遇する時は

該病に陥り易きものとす此外血友病の如きは最も遺傳性疾患の著明なる類例にして其他近眼、脂肪過多症、色盲、聾、啞等も亦遺傳素因に歸すべし

蓋し先天性疾患の過半は唯其素因のみを子孫に傳ふる者にして多くは疾患其物を傳ふるに非ず然れ共稀には疾病自個の遺傳を見ることあり例せば微毒の如きは其適例なり古來結核、癩病も亦疾病自個の遺傳なりとして殊に本邦に於ては良縁を選ぶ際血統を探索するを例とせり而して結核に至りては一家族内親子相前後して結核に惱める場合に於て之れを親子間結核自個の傳染と謂はんより寧ろ結核に罹り易き素因或は體質を遺傳するものと謂ふを至當なりとす

該素因を有する子女は肺癆に惱める父或は母と一家内に於て棲息すること在れば其結核を患者より傳染し易きは理なり是れ一般人の疑はざる處なりと雖も其大多數の場合に於ては疾病自個の直接傳染に非ずして其遺傳の素因有るが爲めなりとの説は蓋し正鵠を得たるも

のと謂ふべし

遺傳の意義 遺傳とは精蟲及び卵細胞結合の際父母の性状が発生すべき胎兒に賦與せらるゝの謂れなり

故に疾病自個の遺傳とは精蟲及び卵細胞結合の際其一者或は兩者に附着せる病毒の胎兒に傳はり或は胎兒の子宮内發育中母體より胎盤に介して傳はり或は子宮内に於て得たる疾病此等は凡て眞の遺傳性疾患と共に之れを先天的と認め得可きものなり

第貳節 外部原因

一定の職業は往々一定の疾病を將來す即ち疾病の媒介若しくは原因を爲すことあり例之朝夕執筆に従事する者の書癩、音樂家の手指癩、終日讀書を事とし殊に試験前等に於て腦過働に因する學生の神經衰弱、活字鑄造職若しくは日常白粉にて扮せる俳優の鉛中毒、石工、鑛山乃至石灰山の工夫は肺疾患、日常鑛物の粉末を以て填たされたる空氣中

に於て働作せるが故に所謂肺の吸入病、就中石末、炭末、鐵粉沈着病等に罹り亦肺疾患の素因を爲すものなり、座業の足脊は諸處に皮膚の肥厚を來す、藝妓乃至三味彈の手指骨の肥大、其他職業に因する疾患若しくは變形を引擧すれば實に枚擧に遑あらざるなり

風俗習慣も亦屢々疾病の原因乃至變形を來すものなり、例之支那婦人の足は人工的に變形せられ、萎縮彎曲す、歐米人の皮膚の局所硬變多く、アイヌ(北海道土人)の足蹠の硬結、歐米婦人の絞窄肝を見るを常とす、日本人の坐する習慣も其軀幹長大に關係を有すと、其他酒客、喫煙者乃至特種の飲食嗜好家等は所謂習慣として敢て直接其害を認めざると雖も決して否らず、其臟器組織中何れにか變形を來たし、以て病毒に侵襲され易き素因を形成するは理の觀易きことなり

氣候及び衣食住是れ亦吾人の健康上大なる關係を有するや勿論なり、即ち寒帶地方に呼吸器病の多く、熱帶地方に消化器病及び寄生性諸病多きなり、而して氣候の寒暖に隨ひ人種の相違すると共に一様ならず

る所の衣食住の三者は人生必需の物品なるが其宜しきを得ると否とは大に一地方一家族に於ける健康状態に至大の關係あり就中衣服住居は第二第三の皮膚と認む可きものにして外界刺戟(空氣、寒暖、乾濕、日光、風雨等)に對する防禦的の器具に外ならず蓋し衣服は體温の放散を防ぎ且つ外氣をして吾人の健康上に適せしむる所の役を務むる物なるを以て衣服の清潔は勿論良性をも選ばざるべからざるなり故に衣服の粗悪不潔に因する疾患は下等社會に於て多し例せば皮膚病傳染病其他寄蟲性病等は多く貧困者に見る所なり

住居が身體の健康に關係あるは地盤の清潔なると不潔なると又は室内空氣の流通及び光線の射入如何に有りとす食物が吾人の生命を全ふせしめ得るは勿論なりと雖も之れが配合調理の點に於て第一人の職業に隨ひ一樣ならず勞働者は粗悪多量の食物に堪ゆるも精神を勞する者又は座業に従事する者等は凡て消化宜しき食品の少量を攝取すべき要あり又年齢に由りて異なり或は職業を轉じたるに由り乃至

異邦に移住し若しくは生活の程度に劇變を來したる時は往々腸胃の不和營養の障害を將起すること其例尠からず

第參節 創傷

身體の損傷には種々有り其外部組織の離斷は之れを總稱して外傷と謂ふ而して銳利なる刀劍乃至尖銳なる物體に由りて生じたる創傷は創縁平滑なり所謂平滑切創是れなり蓋し外力の強く且つ速かなる場合に於ては鈍刀乃至非尖銳なる物體と雖も能く平滑切創を生ず之れに反して外力の加はること弱く且つ遅徐なる場合或は鈍刀乃至尖銳ならざる物體は所謂挫傷を生ず其他骨組織の皮膚及び皮下結締組織のみより被はれ皮膚と骨組織との間に厚き脂肪組織及び筋層を缺如せる部位(例せば頭蓋顛頂部)は外力に對する骨組織の抗抵強きが爲め棍棒の如き鈍き物體を以て毆打せらるゝも能く平滑切創を生ず凡そ硬固なる基礎の上に擴延せる外表は平滑なる創傷を呈するを常とす

外力の働き愈々強き時は獨り外表のみならず深層なる四肢其他の骨格も亦損傷を被り離斷挫折せらるゝことあり之れを骨折と稱す外力の強弱に隨つて骨折の完全なる者不全なる者あり外力の損傷部に直接乃至間接に加はりたるに由りて或は粉碎骨折を來し或は兩骨折端相符合する者有り又同時に軟部及び外表の挫碎を生ずると否とに隨ひ複雑骨折單純骨折と二様に區別す前者は即ち複雑後者は單純なるを以てす其他兩骨折片轉位の方向に由りて各名稱を異にす即ち離間的轉位外脱的轉位廻旋的轉位屈曲的轉位等に區別す

又外力方向部位に由りて骨折を來さずして關節面の離隙を將來すること有り即ち關節頭の關節臼を離れ到底舊に復せしむること能はざる場合を稱して脱臼と謂ふ

以上外力に由りて被りたる損傷は未だ疾病と名稱する能はず然れ共其負傷者に及ぼす影響は第一直接に生命の危険を將來すること屢々あり即ち出血甚しき場合内臟出血或は腦脊髓等の震蕩挫傷破碎等は

負傷者を死に致すを常とす其他腦脊髓強劇の壓迫等も往々危険に陥らしむるものなり諸種の外傷急劇なる場合は卒倒又は所謂外傷性神經症の原因となるに在り

外傷に由りて被りたる創傷部には血液の浸潤漿液の滲溜を來すが爲め是れ等の液類及び破壊せられたる組織は其周圍の組織に對し異物として働くが故に爰に所謂反應性炎を發す而して平滑なる創縁を有し創傷隙内に於ける液の滲溜少き場合に在りては再生現象に由りて缺損は容易に補綴せらる可きものなり然れ共挫傷殊に皮膚の損傷甚だしき時は組織は既に破壊せられ所謂壞死に陥るを以て生理的治癒上大なる障害なりとす

凡そ外傷は其對外防禦の具たる外皮を缺損するが故に勢ひ組織の壞敗液類の滲溜を來し爲めに外氣中に在る若しくば已に衣服其他の物に附着し居たる下等菌類の體內へ侵入の機會を與ふると同時に良培養基をも作り出すものなるが故に人若し創傷を被りたる時は之れが

防禦法を寸秒も怠るべからず

第四節 火傷

灼熱せる物體若しくは熱湯蒸氣等に觸接乃至接近せる時は所謂火傷を被むるにあり而して斯損傷大小に由りて左に區別を爲す

第一度 最低度にして高熱度に觸接した部の紅潮に止まる者

第二度 觸接部皮膚に水泡を生じ疼痛及び其周圍紅潮せる者

第三度 疼痛劇甚にして局所組織の壊死を來したる者

第四度 最高度にして皮膚皮下のみならず筋層及び骨組織も共に燃焼せらるゝ者

以上の内第三度迄の火傷は多く治癒し且つ速かなるものなりと雖も火傷を被りたる外表の面積體面の三分の一を超ゆる者は死に致すと謂ふ(血球の頽敗毛細管栓塞窒息等に陥るものとす)

第五節 凍傷

凍傷は火傷の反對現象にして即ち最低温の物體或は空氣に觸接するに由りて生ずる組織の變化にして此變化は略ぼ第一度火傷に於けると類似する者あり唯凍傷に在りては血管の擴張を來し或は直ちに血管收縮し皮膚蒼白となる者あり第一度局部暗青赤色を呈し痒感を來し次で水泡を生ず第二度局所組織の壊死を致す(血行停止血色素の游離其損傷部は多く鼻尖外耳四肢の尖端に在り)

第六節 藥物中毒

諸藥液の身體に及ぼす影響は或は直接に體の外表若しくは諸粘膜面に於てするものあり或は血中に吸収せられて後ち血液に變狀を起し若しくは神經中樞乃至末梢又は腺臟器筋組織を變性せしむるものあり此等を總稱して吾人は藥物中毒と謂ふなり

(一)酸類殊に(硫酸)亞留加里及び諸(硫酸鹽)類例せば(硝酸銀、硫酸銅、亞鉛酒)精等は之れを皮膚に貼する時或は誤て又は自殺の目的に嚥下する時は(觸接)せる皮膚及び粘膜を暗黒色乃至黃色より灰白乃至白色に溷濁せしむ之を(腐蝕)作用と謂ふ然れ共是れ濃厚なる藥液を嚥下したる際に起るものにして(藥液)稀薄なる時は單に刺戟藥として其局部に充血を來すに止まるものなり故に(藥物)量度如何に隨て組織の被むる影響も亦固より一様ならざるなり

(二)特種の生理的作用を有する毒物所謂特種毒物に屬する藥物の過半は(植物性)類鹽基に屬するものにして是れ一旦血中に吸收せられたる後ち一定の(臟器)組織に働き其官能をして異常に亢進せしめ或は減弱せしむされど(少量)に用ゆる時は單に興奮せしむるに止まり其大量を投ずる時は(痲痺)狀に陥るものあり其他特種の毒物に在りて(少量)にして固有なる一定の反應を惹起し其變狀を(肉眼)的若しくは(檢鏡)的に認むること能はざるもの尠なしとせず

「モルフィム」^{「クロ、フォルム」}「アルコホル」等は(神經系)に害を及ぼすものにして殊に其中樞を痲痺せしむ人之れを(痲醉)藥と稱す

「エーテル、コカイン」^{「クロ、フォルム」}「アルコホル」等は能く末梢(知覺)神經に害毒を及ぼすを以て之れを皮下に注入し其(局部)の(知覺)殊に(疼痛)を奪ふが故に(人稱)して(局部)痲醉と謂ふ「^{「デイヤタリン」}「アトロピン」等は心臟に(障礙)を及ぼすものにして其(著明)なる(部位)は(心筋)及び其(神經)細胞又は(血管)神經乃至其中樞等に在り此等の物を稱して(心臟)毒と謂ふ(磷、亞砒酸、砒石、アンチモン、鉛、昇汞)等は前記の毒物に比すれば寧ろ(慢性)中毒を起し且つ一定の組織に(解剖)的變化を將來するものあり

(磷)の(急性)中毒は(肝臟)に(著明)なる(變化)を呈し即ち(肝臟)は(腫大)し往々其(脂肪)變性に(陥り)中毒者は(三日)乃至(八日)目位に於て(死)に至るを常とす

(亞砒酸)中毒も亦(肝臟、腎臟)等の(脂肪)變性を來し(死)を致すものあり(水銀)中毒の(急性)なる場合に於ては往々(腸胃)粘膜に(出血)性(加答兒)を

來し其他心筋、腎、肝等に退行性變狀を將來す慢性水銀中毒に在りては屢々神経系に影響を及ぼす者あり
鉛中毒は往々末梢神経乃至伸張筋を侵し所謂鉛局所痲痹を起し或は銳痙攣、腹壁平滑筋の攣縮を起す
慢性「アルコール」中毒ハ腸胃、脂肪、肝、腎、神経系殊に腦に障害を來す者あるは吾人の常に目撃する處なり

第七節 寄生蟲

寄生蟲が臟器組織に及ぼす損傷は雷に一臟器にのみ止まらず其悪性にして而も強劇の者に在りては人をして死に至らしむる(虎列刺、赤痢、實扶斯、ペスト)前者に比して漸々緩徐なりと雖も内臓に蕃殖したる場合(肺、腹膜、肝、腎、腸、胃乃至皮膚に在りては癩病)は亦死を免れざるものとす其他直接乃至間接に害を及ぼす寄生蟲は無限にして今日の細菌學と雖も未だ能く盡せしに非ざれば到底本書に於て其一端を論述せん

とするも冗長に失するの虞れ在るを以て茲に略す(細菌學書に由りて參考すべし)されど寄生蟲が吾人身體内外に寄生したればとて必ず吾人は之れに侵襲され可きものと定まらず曩に病理概論にて述べたる如く之れに對する抵抗力の十分なる時は能く制壓するに至るものとす蓋し寄生蟲は宿主の營養分を吸収し以て生活せるが故に其性質の好悪及び多少の如何に拘らず吾人身體に一旦是れが寄生するや有害は亦必然なりとす(參考書山極氏病理總論)

第貳編 暗示總論

暗示とは何んぞや即ち命令若しくは慰談に服従乃至信仰したる結果として其觀念の實現したる精神及び精神物理的現象是れなり

第六章 暗示

暗示の意義に就ては諸家其説を異にすと雖も要するに暗示は主觀的即ち其者の内容如何んに由りて規定せらるべきものなれば如何に甲者が大々の決心を以て而も強迫的に命令若しくは慰談を爲すと雖も乙者が之れに反抗し若しくは他に注意を向け居り更に甲者の言語舉動に意を拂はざる場合は到底暗示の實を擧ること能はず之れに反して甲者は乙者に對し暗示する意志無きにも不抱空然甲者の談話乃至行動が直ちに乙者を暗示すること有りと雖も治療的暗示を明確に爲さんと欲せば先づ其準備所謂先立過程を設くるを以て緊要なりとす

否らざれば如何に努力すると雖も多くは徒勞に歸し假令催眠者と雖も矛盾せる暗示には往々反抗すること在ればなり

第七章 暗示の分類

暗示を明確に實現爲さしめんと欲せば暗示其物を混同せざる様整理爲し置くの必要ありレーウエンフェルド氏は左の如く分類せり

- (甲) 他發暗示
自發暗示
 - (乙) 直接暗示
間接暗示
 - (丙) 意識的暗示
無意識的暗示
 - (丁) 醒覺暗示
催眠暗示
- 以上は少しく繁雜の嫌ひあるを以て余は次の如く分類爲さんと欲す
- (甲) 他働暗示
 - (乙) 自働暗示

(丙) 直接暗示

(丁) 間接暗示

(甲)他人の言語或は行爲又は文章乃至物體、音樂其他直接外界刺激に由りて解發せられたる場合は之れを他働暗示と謂ふ而して他働暗示の内更に左に分類爲し置くも亦便宜なりとす

(一)言語暗示(言語に由りて解發せられたる時)

(二)行爲暗示(行爲舉動等に由りて解發せられたる時)

(三)文章暗示(文章にて暗示したる場合)

(四)物體暗示(物體即ち事實が暗示となる場合)

(五)音樂暗示(音樂より來る時)

催眠者に向つて汝の頭痛は癒せりと此言語に由りて果して患者治癒したりとせば即ち之れを言語暗示と謂ふなり然れ共其患部を摩撫し或は輕壓し或は輕打等所謂按摩法を併用したる時は單に之れを言語暗示と謂ふ可からず即ち行爲暗示を併用したるものとす亦實際の場

合に於ては(一)(二)を併行するを以て良策とす稀には言語のみにては暗示とならざる者あり例せば十二指腸蟲發生の爲め腦貧血を將來し而も其患者に解剖學の知識無き者に在りては驅蟲暗示を爲すと雖も其患部何れに在るかを知解せず然る時は暗示も隨て效薄きのみならず全く無效に終ることあり斯る場合は即ち爲行暗示の必要とする處なり而して言語には往々行爲の伴ふを常とす例せば人熱心に角力を談する時は知らず識らずに其言語を行爲に現せり又物體の形狀を談する時は不必要なる手眞似を爲し天と謂ふ時は上を仰ぎ見地と謂ふ時は下を見下し其他言語に行動の伴隨する事實は吾人日常の生活に於て屢々見る所の現象なり而して行爲も亦言語を代表することあり例せば信號の如きは數哩隔たる所の者に能く其意を通じ又俗語に氣があれば眼も口程にものを謂ふ此等は即ち兩者の關係を能く穿ちたるものとす斯る現象は勿論心理學上觀念聯合の法則に従順したるものにして敢て奇異と謂ふに非ざるなり

上來の如く言語と行爲は共に相通じ相代りあうものなれば二者を同時
時に用ゆることは實際家の最も採るべき所なり

(乙)暗示を受理する人身の精神より自働したる時は之れを自働暗示と
謂ふ

例せば常に信用せる醫師の調劑は效有りと雖も嘗て庸醫を以て目する
醫師の調劑は比較的效能少なきのみならず或る者には全く無能なる
ことあり是れ前者は患者が常に信用せるが故に彼の醫師の調劑な
れば必ず治癒するならんとの觀念即ち自働暗示の行はれたるに由る
之れに反して後者は常に信用せざるが故に却て自身に不利益なる自
働暗示を發し庸醫の調劑は無効ならん轉醫すること世間往々見る事
實なり又余が出張所へ來りし一患者あり診するに肋膜炎の疑ひあり
主任醫も亦余と同意を洩せり故に兩三日其經過を見たる後に於て診
斷せんと思慮し當日は單純なる藥劑を投じ置きたるに患者其翌日に
來りて曰く御陰で餘程快方に赴たりと而して第三日目には全く病者

に非ざるに至れり主任醫は此現象の奇異に喫驚し居たり是れ即ち
腹藥すれば疾患は必ず治癒するものとの所謂自働暗示の結果なり又
熟練せる醫師は胃瘧乃至神経痛喘息發作等には當初一二回は「モルヒ
ネ」を注射すると雖も其數回に及ぶ時は自然藥物中毒を虞り唯に蒸溜
水を注入すされど「モルヒネ」と同一の効果を奏するなり是れ患者が蒸
溜水を「モルヒネ」と思慮し必ず治癒す可きものと自働暗示を爲せし結
果なりとす之れに反して余の知人或夜深更に及んで突然門を叩く者
あり應じて之れを聞けば俄然胸部に劇痛を發し患者既に死せん許り
なり請ふ往診をとある早速腕車を整へ病家に馳せ着け診するに肋間
神経痛なり先づ不取敢應急手當として「モルヒネ」を一投注入したり然
るに何等反應をも呈せず苦悶の中より患者更に一投を請ふ其苦痛見
るに忍びざるを以て之れに應せり而して三十分時を経過すれ共其效
更に見えず此時患者曰く妾の痛は「モルヒネ」に非ざれば鎮靜せず是非
「モルヒネ」を用ひたしと醫師は此言を訝り、今汝に投せしは「モルヒネ」な

りしなりと其現品を示したるに患者曰く恐縮の至りなれど夫れを「モルヒネ」を指し今一應注入されたしと醫師は該患者の猜疑心に由りて來る現象と觀破し更に少量の「モルヒネ」を注入したるに暫時にして疼痛消退せりと此等は即ち其者に不利益なる自働暗示を發せしものとす又苦悶患者が醫師の乗り來りし車の音を聞き緩快を覺え齒痛者が齒科醫の門を潛るや往々其輕快を覺ゆるが如きは所謂自働暗示に歸來するものにして其他祈禱、禁厭、神水等も信仰無き者に在りては何等の效をも見ず其效顯ある所以は即ち自働暗示の行はれたる結果なりとす自働暗示は吾人の生活上最も大切なる心的作用にして亦何人も之れを具有せざるはなし蓋し自働暗示に由りて或は利を得或は害を來す等は其者の意思又は境遇の如何に由りて規定せらるゝものなり而して嚴密なる意味に於て之れを論ずる時は自働暗示と稱するものも絶對的自働に非ずして其自働の根原は所謂他働暗示の必ず存するに在り假令彼の醫師の調劑は自分の疾病必ず治癒するものとの觀念

より服用し又は神佛に禱願をすれば必ず快癒するとの信念等に由りて其疾病治癒せしものとせんか斯る現象は即ち自働暗示ならん然れ共醫師を信用し神を信仰する其根柢を探つて見れば或は他より勧誘され或は其效顯を得たる事實を目撃し乃至新聞雜誌等若しくは傳説等に由りて既に他働暗示が直接乃至間接に行はれたるにあり故に綿密に論せんとすれば兩者の區別は唯説明上便宜に由りて區別すると謂ふの外なし

(丙) 第三者を介せず又は症候に對し直接に爲したるものを之れを直接暗示と謂ふ

例之患者疼痛を訴へる場合直ちに疼痛消散を命じ幻覺錯覺を訴ふる者には其誤謬を諭し妄想を描く者には之れを奪ひ其他患者の訴ふる所其原因如何んに不抱直ちに治癒を命ずること是れなり

(丁) 第三者を介し若しくは患者主訴乃至想像以外に暗示する時は之れを間接暗示と謂ふ

例之第三者が其效能を説き患者之れに由りて治癒觀念を抱き其結果として奏效せし時此等も間接暗示に算入すべきものとす蓋し第三者が效能を説明したるは術者の暗示を能く受理すべく所謂先立過程を造りたるに過ぎざるものと雖も既に其暗示となるべき基礎を造りたるは第三者に在るを以て此場合に於ては術者の暗示より寧ろ第三者の説明が遙に優等なりしが故に即ち之れを間接暗示と稱するなり又外科手術施行に際して直接暗示(無痛)にて效無き時は其局部の痲痺を命ず之れに由りて成功したる時は即ち患者は痲痺したるが故に無痛なりとの連想を發起したるものと認む可きなり又腹痛者にして無痛暗示無効なる時は便通暗示を爲す凡て以上の如く間接に爲す場合を指すなり間接暗示は治癒上最も必要なるものにして術者は常に之れを心得居らざるべからざるなり殊に歇私的里依ト昆姪兒患者等に遭遇したる場合の如きは實に亦然り

第八章 暗示感受性

暗示感受性とは即ち暗示に感應すべき性質を稱したる言葉なり而して該性質は人も動物も均しく共通的に具有したるものにして例之子が親の命に背かず雇人が主人の命に服従し宗教信者が其傳導者を歸依し學校生徒が教師に歸伏し法律は一國の制度を治め其他社會を圓滑に而かも秩序的に爲さしむる所以は即ち吾人々類は暗示感受性を備ふるが故なり人若し暗示感受性が薄弱なる時は到底社會生存場裡に立つて活動爲すこと能はず何んとなれば瘋癲白痴の如きは暗示感受性の消耗せる最も好標型なりとすシデイス曰く暗示感受性は吾人々性の要素なり吾人は該感性より離脱し能はず該感性は常に吾人と共に在り而して人類の一般標型は社交性に非ず理性に非ず正に此暗示感受性なり又曰く人類は暗示に感應する動物なり然り此言の適切にして能く其真理を穿ちたるものと謂ふべし

既に論じたる如く暗示感受性は殊に人類の性能なりとす然れ共該感性は各人一樣にあらず即ち個人個々に由りて性質の異なると共に又暗示感受性の強弱を異にするものとす更に一步近めて論ずる時は暗示感受性の強弱に二様あり例せば甲は他働暗示感性鋭敏なりと雖も乙は該感性の遲鈍なり之れに反して乙は自働暗示感性に鋭敏なりと雖も甲は之れに對して遲鈍なり然らば凡ての者が右の比例に在るやと謂ふに決して否らず其傾向は勿論具有すると雖も自他強弱の差は多くの場合に於ては其時の境遇乃至事情に依つて規定さるゝものとする例之平常意志の強固なる者に在りても一度逆境に立つか乃至疾病を醸したる時は頗る薄弱となるものなり常に物質論を固執し其思想に伴はざることは假令事實なりとも之れを容れざる者が一度疾病に罹り醫療の效無き時は祈禱を信じ禁厭に頼り遂に迷信者の群れに陥ること世間往々觀る事實なり然れ共暗示感性の強弱は通常左の條件に由りて規定さるゝものなり

(甲)他働暗示感性の鋭敏なる者

- 一性 女子
 - 二年齡 少年者
 - 三教育 關係なし
 - 四職業 軍人判官宗敎家學生職工
 - 五住所 田舎
 - 六家庭 有福圓滿
 - 七性格 溫厚實着
- (乙)自働暗示感性の鋭敏なる者
- 一性 男子
 - 二年齡 中年者
 - 三教育 關係なしと雖も概して教育ある者
 - 四職業 學者醫師辯護士警吏商人
 - 五住所 都會

六家庭 非有福、非圓滿

七性格 理解心乃至猜疑心に富める者

以上例擧したる理由を聊か論述すれば即ち下の如くなり

甲(一)女子は男子に比すれば意志薄弱にして而かも感情に強きを以てなり(二)少年者は經驗に乏しく且つ模擬性の發達時代にして總て想像力に富めるが故なり(三)教育の有無は著明なる關係を認めず(四)概して雜務に接近することの少なきを以て自ら思想單純なるに由る(五)田舎に居住する者は外界刺戟に際會することの都人士に比すれば尠なく加之風土等の習慣として概して質朴なるに依つてなり(六)家庭の圓滑及び有福は常に一斑の疑惑を起させず従つて其質朴性は自然に備はるに在り(七)溫厚着實なる者は他人の言に疑を容れざるを以てなり(八)乙(二)男子は女子に比して思想繁雜加之意志堅實なるが故なり(三)中年所謂分別盛りと稱して批評的精神の旺盛時代に由る(三)教育を有する者は理解心に富めるを以てなり然りと雖も或點に於ては往々反對現象

を觀ることあり(四)學者、醫師、辯護士等は自負心に強く警吏、商人等は各種の者と接近すること頻繁なるを以て先づ其者の意思を考察し然る上にあらざれば自己の眞意を洩らさざる習慣を得たるを以てなり(五)都會に住居する者は比較的質朴を缺如す(六)不圓滑なる家庭に育ちたる者は所謂猜疑心に強きが故なり(七)主觀的活動を制止すること能はざるが爲なり

老人は男女を問はず一般自他共に感受性遲鈍なり并は内外刺戟に對する反應薄弱なるに至るが故なり

上來の如く自働暗示感性に強き者は他働暗示感性に弱く又他働暗示感性に強き者は自働暗示感性に弱し是れ一般通常の場合に於ける現象なりと雖も既に論じたる如く人不幸にして逆境に立ち乃至病魔に襲はれたる時は乙者と雖も大多數は甲者と同一の性傾を露すものとす果して然らば他働暗示感性は順境の時より反て逆境に立ちし場合に於て充進すべき質性なるやと謂ふに否らず人逆境に立ちし時は唯

依頼心の強く發起するに由りて生ずるに在るのみ古來多くの學者は暗示感受性の鋭敏なる時を病的精神と見做し居たり殊にビエールジャーネの如きは其最も熱心なる主張者なり蓋し暗示感受性には無数の段階あるを以て病常の差別甚だ困難なりとす而して爾來暗示感受性の最高度なる者は歇私的里に罹りし者を以て標本と爲せり然り歇私的里患者の多くは自己の想像が直ちに身體に實現し例之曇天なるが故に頭痛はせざりしやと思へば忽ちに頭痛を發起し或は他人の病態を見て夫れに同情を表し前者と同様なる症候を呈すること或は外科手術の際に立會し定めし痛からんとの想像が直ちに氣絶となる等其他感情には最も驅られ易きものなり故に歇私的里は自他共に暗示感受性の充進せる者にして就中自働暗示感受性の最も充進したる者なりとす人催眠中に在りては主觀的働作の一時休止せるを以て強劇なる自働暗示感受性を有する者と雖も此場合に在りては即ち無念無想なるが故に他働暗示に能く感應し其感受したる事柄は即ち其者の自働暗示と

なり而して尙一層の強力を以て精神全界を支配するものなり換言すれば催眠術に由りて歇私的里の治愈するは患者の抱持せる不利益なる自働暗示を打破し更に利益なる他働暗示を與ふ該暗示が取りも直さず自働暗示となるに至る更に約言すれば其者に不利益なる自働暗示を有益なる自働暗示に變換せしむるにあり
上來の理由に依るを以て催眠中に作爲する暗示感受性は通常の場合醒覺に於ける暗示感受性に比較すれば後者に超越すること數等なるや觀易き理なり斯く論じ來る時は暗示感受性を充進せしむるに最も恰好なる精神状態を構成するには催眠状態と爲ることに如かず故に催眠者は暗示感受性の充進せる標型として見るべきなり

第九章 暗示感受性と暗示の強弱

凡そ吾人の神経は外界無數の刺戟に由りて興奮すべく能性を有するが故に譬へ刺戟が微弱に在りたりとて必ず其反應を呈すべきものと

す然れ共其反應微弱且つ遲鈍にして吾人の要求を充たすに足らざる時は吾人は之れを稱して無効と謂ふ直言すれば暗示を爲すと雖も暗示とならざる場合是れなり例せば催眠術は一般に暗示感性の亢進し居るを以て如何なる暗示に在りても必ず受理すべきもの従つて夫れを實現すべき者なるにも抱らず所謂無効に歸することなり斯る場合に於ては其原因を二様に求めざるべからず即ち一は主觀的經驗者其人の精神及び身體の事情に由るものと認め一は客觀的刺戟の微弱に由るものとす實際多くの場合は刺戟即ち暗示の微弱と其當を得ざる等に由りて失望するものとす故に暗示強弱は成功の上に大なる關係を有するものなり例令人を催眠せしめんとする場合に於て術者の地位に立つ者が夫れ自身に於て成功を疑ひ被術者に對して其意を洩すか乃至言語に舉動に曖昧然たる動作を爲す時は到底成功を望まれべきものに非ず之れに反して術者威嚴と態度を保ち其成功の確實を言語乃至舉動に現はせる時は成績頗る良好なるに在り是れ實際家の常

に知る所にあり又催眠者に「貴方の手は上に擧ぐる」と能はず既に擧らざる様になりしなり以上の如く暗示したるにも拘らず催眠者は其手を擧げること在此場合に於て更に命令風に汝の手は最早微動だも爲すこと能はず汝の手の筋は痲痺したり汝如何に努力すると雖も決して擧るべきものにあらずいざ擧るならば擧げて見るべしと右の暗示に由りて往々成功を見ることがあり斯る時は即ち前者は暗示の薄弱に職由し後者は暗示の強激なりしに由りて解發したるものなり故に暗示が暗示とならざる場合は其微弱と當を得ざる等に基因すること屢々是れあればなり而して稀には内外の條件に依らずして單に暗示感性の薄弱なる者あり此者にありても屢々練習する時は終に感受性を増進するに至れり

總て暗示は其者の精神内容の如何んに由りて決定せらるゝものなりと雖も吾人の精神は刺戟の高度に傾注すべき傾向を有するが故に如何に内容に活動が在ればとて夫れを打消すだけの刺戟のありし時は

精神活動は直ちに其方面に移行するものとす例令吾人が或緊要なる事柄を思考しつゝ、在る時卒然友人來りて日比谷公園に散歩を勧めんか我は緊要なる事項を思考中なればとて之れを謝絶す然るに友人曰く本日は旅順陥落の祝捷會なり斯る祝日には再び遭遇爲し難く且つ戰勝國の國民として此壯觀に列せざるべからざるは勿論加之本日は東郷大將及び上村中將其他陸海軍將校等の實戰談もあれば是非赴くべしと再三再四強て勧めむる時は遂に日比谷に散歩することの精神となり全く以前の精神活動は消散し友人の勧めに由りて生じたる第二の活動を爲すに至れり此場合に在りても若し友人の勧誘が拙劣に在るか乃至一二回にして斷念したらんには到底彼れを日比谷公園に伴すること能はず而して彼れを日比谷に同伴したる所以は即ち暗示が其當を得たると且つ強激なりしが爲めなればなり其他日常の現象殆ど此法則に倣はざるはなし殊に治療暗示の如きに至りては此等を看過したる時は失望に陥ること往々是れありとす例せば患者激痛を

訴へ居る時暗示が微弱に在りては其效奏し難きのみならず第一催眠せしむることの困難なり麻酔藥の未だ發明されざる時代の外科醫は其手術に際して患者激痛を訴ふる時は往々大聲以て叱咤し曰く何に此位の痛は何人にも耐忍出來得べきものなり斷れば痛を覺ゆるは當然のことである」と此言頗る不親切なる如く聞ゆれ共決して否らす是れ疼痛を微感爲さしめんと努めたる所謂他働暗示なり若し醫師が此反對なる(患者の訴へに同情を寄せ定めし痛むならん或は耐忍出來難くならんなど)と謂ひ態度を採る時は患者尙一層の激痛を覺え終に手術に耐へざるに至らん此場合に在りて前者は一見殘忍酷薄たるに見ゆれ共結果は至善厚情に在り後者は一見親切に見ゆれ共前者に劣ること數等なり故に治療を營爲せんと欲する者は常に患者の鼻息を伺ふことにのみ吸々爲さずして斯る奇策的暗示を自在に用ゆることも大に必要なりとす

第參編 暗示奏效の理由

第拾章 暗示能力

暗示解發の結果として疾病の治癒せるは事實が常に證明するところにして敢て多辯を要するの必要なしと雖も暗示に由りて疾患の治癒せる理由は是れ研究者の何人も知解せざる可らざる重要な問題なるにも抱らず未だ詳論せし者無きが如し稀には是れ在りとするも多くは斷片的にして初學の者を會得せしむるに足らずとす余は該問題に就て聊か秩序的に論敘せんと欲す總て暗示を受理したる精神生活を稱して吾人は之れを暗示觀念と假稱す而して其暗示觀念を構成するに第一要件としては暗示其物にあり次に必要なは所謂注意是れなり如何に強激なる暗示を施すと雖も之れに注意の向かざる時は到底暗示とはならざるなり此點より見る時は暗示觀念の第一要件は暗

示其物より寧ろ注意力にあるなりされど注意は暗示に由りて惹起され可きものなるを以て兩者相須ちて初めて爰に暗示觀念を形成爲すものなるや勿論なりとす

暗示其物に就ては前章に於て詳論爲したるを以て讀者既に了知せられたるものと思考す故に本項に於ては其一要素たる注意其物を論じ而して注意と身體諸臓器の關係を陳述し以て本論の基礎と爲すべし

第壹節 自發注意

自發注意とは教育及び人爲的手段の用ひられざる以前に存在したる注意是れなり小兒及び動物には斯種の注意在るのみなり該現象は蓋し動物の本能なりとす而して其強弱如何んに不抱常に感情的状態に由りて之れを生ずる所以は即ち自己に關し自己に與はる事物所謂不快或は其混合状態を惹起するものに自發的に注意を向くるものにして該注意は亦吾人性格の如何んを表彰するものなりとす

注意状態は外見上繼續するが如く見ゆれ共實際に於ては間斷あるものにして人若し此原則を破り一事物に注意を永續せんか注意は忽ちに疲勞し終に睡眠に陥るものとす故に注意には調節在ることを知らざるべからず又注意は一定の物理的標徴を伴ふものにして一切の思考は皆此原則に順應するものなりラング氏の調査に由れば物理的標徴は左に確然たるものとす

(一)血管運動神經 試に指の尖端に強く注目する時は一種の感覺を生ずるなり人に由りて微痛或は痒痛或は搏動乃至壓重蟻走狀感覺等を感ずるにあり此現象は即ち(一)組織は間斷なく微細なる變化を作營せるを以てなり然りと雖も吾人は常に此等に注意を向けざるが故に知覺せざるにあり(二)注意の作用は血管運動神經をして興奮爲さしめむるが故に己ら其局所に血液の集中するを以て重壓及び搏動を感ずるにあり(三)痒痛蟻走狀は血行の一時的旺盛なるに依りて之れを朦朧と知覺するものとす

(二)呼吸の變化 呼吸の調節を變じ或は弛息或は一時休息すること有り而して注意後の深呼吸氣は疼痛悲哀の時と同じく其目的は酸素を急速に吸入し以て汚穢したる血液を酸化せしむる爲めなり

(三)身體の運動 注意を惹起する身體の運動は極めて重要なことを下文に由りて了知せられよ即ち注意に於ける運動の根本的責職は意識の恰好なる状態を保ち以て意識を奮勵せしむるものなり凡そ注意は大脳の強き興奮を惹起するものにして活潑なる觀念は神經の分子的變化を將來し而して大脳は又運動の機關として重大なる務を爲す先づ知覺表象に伴ふ運動を惹起し次に此等の運動は運動の感覺として腦に達し最後に一方に於ては意識を奮勵しむると同時に他方に於ては新運動の起點となる最大有益なる勞力を増加するものなり斯くして中樞より末梢に又末梢より中樞に交互往還の作用を營むものとす

第貳節 他發注意

他發注意とは未だ心目を聳動する性質の非ざりし者に人爲を以て此性質を有せしむること換言すれば自然的興味を有せざる事物に人爲的興味を附することは是れなり更に約言すれば自發的注意を他の方面に向けしむることなり此等は兒童を教育するに際して兒童が其當初興味を有せざりしものに興味を有するに至るを見ても推知するに足れり

而して注意状態に在りては自他を通じて心が機制を呈すものとす絶對的に非ず即ち心の視野が狹隘となり自然他を禁止し一に固執せざる可らざる必要を將來す執意的動作は其衝動的なると禁止的なるとを問はず均しく筋肉に作用し又筋肉を経て作用するものとす故に他發注意の場合に在りては常に動的要素が伴ひ居れり知覺の場合に於て見るに運動爲さざる局處には知覺を存せず又表象觀念は知覺の複

起したるものなるを以て運動の複起も亦觀易き理なり然るに概念の場合に於ては奈何從來概念は言語の助けなくして類似心象の融合より生じたるもの言語の補助に由りて隔異せる心象の融合より生せしもの及び唯全く言語とのみ爲りて殆ど之れに伴ふ表象を缺くものとの順序を経て發展するものなるが故に其何れにも動的要素の存在せるものとす蓋し一物に注意を向けると謂ふ意義は其機制を考察するに或る運動を高め其他の運動を禁止するにあり之れを意識方面に就て謂へば一心状態を強め他を禁止するに在り而して一心状態と稱するも單一なる一心状態に非ずして一群の心状態を強固ならしむるは明白なり

第參節 注意の病態

注意の病態に就ては其輕重如何んに依りて之れを區別せざるべからず而して之れが段階は數様にして一々論述する能はざるを以て唯本

書の目的に添ふべき二三状態を敘述せんと欲す

人精神が攪亂せりと稱する時は外見上同様なるが如くなれ共實際に於ては各々差異あり或者は絶対的注意缺如し或者は一事物に其全心を傾注したる爲め他事には更に注意の向かざることあり其他注意は多少存すると雖も實用を爲さざる者等是等に就ての詳論は本書に重要ならざるを以て茲に省略す次に病態の分類を列挙すべし

抑も注意とは知的状態の一或は一群の一時的卓絶にして個體の自然的或は人爲的適應の伴ふものとす此法則を標準とすれば之れより錯誤せるもの、如何んを伺ひ知るに足れり

(一)或は一群の状態の絶対的卓絶を有し意識界に固執し決して去る能はざるもの之れを注意の過多と稱す(歇私的里依ト昆垚兒症に見る強迫觀念或は固執觀念等是れなり)

(二)注意の更に出來ざる者此原因に二様あり一は聯想急速に失し其調節を缺く場合一は聯想遲緩に失し其間に禁止力の間断あるに在り

は兎に角心意の規律を缺きし者は即ち注意の缺損と見做すべきものなり

(三)病態には非ざれ共生來不確不定性の者にして痴愚弱志乃至無氣力怯懦者に見る現象

以上の三者を分解する時は概ね左に歸着するものあらん

(一)注意の過多は常態より病態に移行する間に於て種々の段階在るものにして嚴密に謂へば何れより何れまでか病態なるやは確然たる分界線を劃す能はず何んとなれば吾人自ら常態と確認せる者にありても他人より見て之れを病態と認むることあり(激感を將起し易き者事物に熱中し易き者其他廣義に解する時は吾人日常の現象中に於て既に常態を隔れ所謂病態の範圍に陥ること尠しとせず)然れ共此所に於て謂ふ病態とは其程度と時間を標準とし且つ合理不合理の鑑別有無等に由りて決定するものなり

凡そ何人の精神にも常に其行爲を支配する主裁的觀念(快樂、名譽、貨財

等の如きを有し之れが生涯を通し遂に一の固執的激感となるにあり斯の如く自發的注意より固執觀念に變移する事は歇私的里依ト昆埜兒患者等は最も著明なる實例なりとす該症には種々の段階あり又經過の上に於ても然りされど大多數の者は緩徐なる經過を取るを以て其變移の状態を観察するに容易なり即ち該患者は往々想像と事實との差別出來ざるものにして譬ば一局部に注意すれば直ちに其感覺惹起し而して之れが牽引の中心と爲りて漸く意識界を支配するに至るものなり

蓋し純粹なる固執觀念に至りては右に比して更に一步を進めたるものとすされど是れ多く感情に屬するが故に次章感情の心理に於て詳敘すべし

(二)注意の缺損は燥狂に於て最も著明なりとす即ち四肢乃至軀體は堪へず震動して靜止すること能はず觀念感情は變化急速なるを以て聯合の結帶果して何かなるものやを認識なし難きものとす斯状態は注

意を形成すべく條件悉く缺損したるが爲め即ち集中適應持續等の作用を廢止されたるに由る然れ共稀には或る一部の記憶異狀無きのみならず反て増進する者あり

腦神經衰弱症に罹りし者の多くは注意の減退を來す是れ本症の一徵候なりとす蓋し神經衰弱は營養不良に基因することの多きが故に強度と持續を缺乏せる意識状態を呈するにあり而して運動神經の活力不十分となるが故に常に倦怠を覺ゆ此等に依りても注意には動的要素の存在せるは益々明白なりとす左れど運動に由りて注意を惹起するや亦注意に由りて運動を將來するやは是れ一の問題に屬するなり以上列記したる處は注意の大意と注意が身體臟器に及す影響にあり蓋し注意が身體に及ぼす影響は上來の如き狹小一定したるものに非ず注意は常に身體諸臟器に限なく關連せることを忘却すべからず次は感情と身體の關係を論じ以て尙一層暗示觀念を明にせんとす

第拾壹章 感情

感情の根本性的性質即ち本能に就ては二説あり一説は感情を以て知性の或る性質状態作用と見做すにあり該説は古來より存在せる者に於て殊に晩近ヘルバルト等の學派に由りて完成爲せしものとす之れを知的學説と稱す他の一説は感情を以て原始的獨存的のものと見做し知性に還元爲し能はざるものとしてベイン、スペンサー、モーズレー、セームス、ランゲ等の主張する處なり之れを稱して生理説と謂ふ著者は固より實驗を本とするの主義なるが故に後説即ち生理説を執るものなり蓋し本書は心理學を論ずるを以て目的とするにあらざれば可成的複雑に涉ることを避くればなり抑も感情情緒情操等と稱する現象には二個の要素伏在を假定し得べきものとす此二要素とは一は客觀的即ち外部に在りて身體の運動、身振、態度、音聲の變化、顔面の紅潮、又は蒼白、戰慄、分泌、排泄に變化を來し其他身體上に起る一切の現象を示

指するにあり直言すれば動的標徴なり他の一は主觀的即ち内部に在りて快、不快、苦、樂等其他一切精神上の現象を示指するなり而して生理説に在りては感情の原因を運動に求め快、不快、苦、樂其他總ての感情的現象は皆之れが記號に過ぎずと謂ふ例之色情の如きに在りても春期發動に至れば器關に變化を生じ夫れと共に漸く意識的となるに在り又吾人の姿勢如何んに由りて夫れに順應したる思想の現出すること往々なり此等の證明は催眠者を以て實驗するを蓋し捷徑とす今催眠者に啼泣する時の姿勢を執らさんか通常人は啼泣する時には先づ首を垂れ瞬き乃至眼を擦するに在り暫時にして彼れは啼泣するにあり此場合に於て其心狀如何を尋問すれば彼れは悲哀の感を發起せりと又憤怒せる時の姿勢を執らせる時は右と同様なる結果を得るにありゼームス、ランゲ等は曰く人は悲しむが爲には啼に非ず啼くが故に悲しみを感ずるに在り又可笑が故に笑ふに非ず笑ふが故に可笑く爲るにありと其他氣分を形成する内部感覺なるものは感情の調子を變化

する有力なる要素たるは何人も均しく経験せらるゝ事實なり之れに由りて見るも感情の根本的要素は運動に歸すべきものならんと然り生理論に據る吾人は該議論に疑惑を挾すと雖も其運動の自動すべき場合は少數にして大多數の場合は外界刺激に由りて解發せらるゝものなれば知的學說も強ち排斥すべきものにあらざるのみならず大に注意す可きものなりとす

第壹節 激感

入感情の激昂したる時は之れを知性の方より謂へば固定觀念と同様なるものにして或る學者は該現象を精神病と同視すると雖も是れ非なり唯感情の劇進したる状態に過ぎず而して固定觀念なるものは所謂強迫觀念にして常に注意中に主位を占め之れを去らんと努むれ共去り能はざる觀念なり此等は歇私的里依ト昆瑗兒等に罹りしものに見る現象にして常態には多く見ざる所なり

第貳節 苦痛

苦痛と稱する現象は從來二の方面より研究の行れ居る者とす一物理的苦痛即ち身體上の苦痛他は精神的苦痛即ち心理上の苦痛是れなり(甲)身體上の苦痛 先づ刺戟に由りて生ずる苦痛即ち疼痛を客觀に觀其解剖的及び生理的條件變化を記述すれば
 (一)疼痛は心臟に影響爲すを以て其作用を鈍癡ならしむ又脈搏の減少するは通例なり而して劇痛の場合は往々人事不省となることあり稀には心臟鼓動の亢進すること及び其調節は常に亂るゝものなり
 (二)呼吸に及ぼす影響は一定せざると雖も調節常に亂れ屢々深呼吸氣を爲すを以て體内の炭酸瓦斯を過度に呼出し以て體温を下降す
 (三)消化作用に及ぼす影響は最も著明にして第一食欲減退し以て消化作用不良と爲り分泌缺乏し嘔吐乃至下痢等を起す若し疼痛永續する時は營養を障礙し尿質を變じ皮膚或は毛髮に變色を來す

(四)運動作用に及ぼす影響は二様あり一は受動的にして收縮し一は能動的にして激烈なる運動を將起す而して疼痛時の運動は快樂時の運動と異り其後直に疲勞するに在り

以上列擧したる處は肉眼的に何人も觀察出來得べき事にして此他檢鏡的調査を経るに於ては尙數多の變化を認知するに至らん而して疼痛の生ずる原因は何れに在るかと言ふに是れ一の研究問題なり本説に就ては古來種々の憶説多しと雖も最近の研究に由れば或る學者は之れを感覺なりと稱し他の學者は感覺の一屬性なりと稱するにあり前者は採るに足らざるを以て後者に就て謂はん即ち感覺の強度に伴ひ感情の昂進するものとせり然れ共是れ亦事實と衝突する場合あり何んとなれば臭氣の如きは如何に強烈なりと雖も疼痛は感じざるに在り故に疼痛は感覺の量に由りて定まるのみならず其性質に由りて決定すべきものとす

(乙)精神的苦痛とは悲哀愁傷恐怖憤怒等にあり此現象に伴ふ解剖及び

生理的條件の變化は左の如し

〔イ〕 恐怖

- (一)循環器に及ぼす影響、血管收縮、心臟痲痺、稀には高度に達して死を致すものあり總て恐怖状態にありては顔面蒼白となるは通例なり
 - (二)筋肉は往々萎縮し戰慄を來す
 - (三)分泌作用は屢々禁止を呈す(乳汁、月經、唾液)
- 其他音聲の破調、口渴、毛髮の直立、呼吸阻塞、咽喉閉塞、内臟器關の不活潑等を將來す
- 而して恐怖の發起する原因は(一)本能的(二)知的(三)病的等に在るものとす

〔ロ〕 憤怒

- (一)循環器に在りては血管膨脹、皮膚血行の増進、殊に顔面紅潮、稀には蒼白を呈する者あり人激怒したる時は往々衄血を發す是れ血行旺盛なるを以て毛細管の破裂するに在り稀には大血管破裂して死に至る者

あり

(三)運動筋の興奮著明然かも不調和的痙攣を起す破調的音聲身體は侵伐の姿勢を採るを通例とす

(三)分泌器胆汁減少唾液旺盛時には閉止することあり

以上列擧したる處は注意及び感情に附帶したる身體生理の條件的變化にして右の内疼痛と悲哀は殆ど同一の變化を呈す亦實際上より謂ふも疼痛には必ず悲哀隨伴し又悲哀にも疼痛の伴ふものとす例之人痛を感じる時は悲を覺ゆるを常とす又心配すれば胸部に疼痛を感じるに在り之れに由りて是れを觀れば吾人の觀念が吾人の身體諸臟器と直接乃至間接に絶つ可らざる關連を有するは明々瞭々なりとす而して其根本的原因は生理的なるや知的なるやは既に論じたる如く余未だ之れを會得せず然れ共事實を基として想像する時は兩者を區別するは唯詩辯的に在りて實際的に於ては何等差別をも認む可からず何んとなれば物理的原因に由りて生じたる或る身體組織の變化疼痛

心悸亢進咳嗽吐血痲痺瘧疾便秘下痢充血貧血其他全身病の一部が轉氣法に由り治癒し又神經精神の異常變化を物理的療法に由りて癒するに在るは畢竟するに兩者が其何れに依るも同一の作用を發呈すべきことの標徴たるにあるなり換言すれば物理的刺戟に由りて生じたる身體の異常變化は直ちに精神界に影響し以て或る感情を興奮せしむ又精神界に於ける奔逸的乃至衰退的變態は直ちに身體組織に影響し以て異常變化を將起するものとすされど爰に注意すべきことは吾人の觀念が其身體組織に及ぼす影響の強弱是れなり例之隨意筋發音身體動作の如きは其最も強大なるものなれ共内臟器の如きに至りて頗る微弱なればなり然れ共是れ吾人が常に内臟に注意を拂はざるを以てなり若し四肢發音の如く吾人生活上の必要に迫られ日常之れを練習爲したるに於ては四肢發音と均しく任意に動作を試むるは敢て至難なることに非ざるものと信ず余の知人に耳翼或は鼻臍等を任意に運動せしむる者あり又觀世物等に於て屢々見る上肢無き者彼れは

下肢を以て殆ど上肢と同様な作營を爲すにあり其他盲人の觸覺啞者の視覺銳敏等は皆生活上の必要に迫られ日常之れを練習したる結果に由るものなり果して然らば吾人が常に内臓の諸部若しくば一定部に注意を向くことの練習を経たるに於ては右と同様な結果を得るや理の解し易きことならん然らざると雖も注意を最強に爲したる時は右と同様な結果を得るにあり此等は歇私的里患者に由りて見るも明かなりとす其他常態の者に在りても注意の強激せし時は通常の場合に於て見る可からざる現象を経験するにあり例令火災等の如き非常なる場合に遭遇したる時は平素百斤の量を支ふるに足らざる者が百二十斤乃至百五十斤の物を家外に運搬爲し居れり此等に由りて見るも注意は身體官能の動作力を増進せしむるは疑ふ可からざる事實なりとす畢竟するに練習とは其動作力を増進せしむる目的の外他に何等の意義も含まざるものなり
 暗○示○觀○念○に○由○り○て○生○ず○る○身○體○的○現○象○は○注○意○の○一○時○的○強○度○を○以○て○意○識

を○最○大○急○激○に○奮○勵○せ○し○む○る○が○故○に○神○經○全○勢○力○は○直○に○此○所○に○集○中○し○以○て○其○動○作○を○顯○著○な○ら○し○む○る○もの○に○あり

既に論じたる如く精神に由りて身體組織を左右し亦身體組織の異常に伴ひ精神作用に變態を來すものなれば兩者を區別するは絶對的のものに非ず是れ畢竟するに説明上便宜に出しものにして嚴密に謂はば到底科學的區別の出來ざるものなりとす

精神身體の關係は略論じ盡したりと思考するを以て是れより本論即ち暗示效力論に移るべし(参考書リボー氏感情の心理)

第拾貳章 本論

暗示能力とは何んぞ即ち暗示を受理したる結果に由りて顯る、一種強大なる力是れなり該作用が身體諸臓器に如何なる順序を経て其疾患を癒し以て舊の健康状態に回復せしむるに在るやは順次稿を逐うて論述せんと欲するなり

(1) 疼痛鎮靜は其性質に由りて自ら解釋を異にせざる可らず即ち外傷(截斷、截開)に因するものと内外疾患に因するものと是れなり(疼痛其物には差別なし詳論は第參編第拾章第參節を參照すべし)前者は暗示觀念(無痛)に由りて痛覺既に禁止せるものか或は痛覺は實際上存するも之れが認識に容らざるかに在り後者は既に疼痛を感じつ、在るものを徐々に鎮靜せしむるに在り即ち暗示觀念に由りて抑制するものとす其結果は同一の如くなりと雖も内容に於ては大に差別在るものとす而して其何れに屬するも疼痛は心理上の現象なるを以て之れを除去し得べきことは常に吾人の經驗が證明する處なり例之角力擊劔等を行ひ居たる時は挫傷乃至鮮血潮の如く溢る、程の負傷爲すと雖も更に疼痛を覺えざることあり又忠勇義烈なる軍人が戰場に於て銃彈に貫通さる、も微痛だも覺えざること之れに反して歇私的里依ト毘瑗兒症に罹りし者は自己の想像に由りて直ちに疼痛を惹起するにあり前者は其對象物に向て注意凝集せるを以て毫も認識に容らざ

るに在り後者は注意の凝集に由りて之れを惹起するものとす其他精神錯亂者は往々疼痛を感じざるなり即ち注意の凝集爲さざるが故なり(2) 出血は其原因及び局所乃至程度、時間等に依りて各々區別爲さる可らず譬ば外部原因に在りては小は針尖の刺傷より大は絶命に致す大負傷乃至外科大手術又内部原因に在りては小は衄血より大は卒中(腦出血)子宮出血(咯血)心臟瓣膜症等に陥り短日にして斃る、に至る等此階段は實に無種無數なるを以て一々之れを論述するは反て煩に失するを以て唯概括的に其大意を述べし

(甲) 外部原因中等度以下の出血に在りては止血暗示觀念によりて血管收縮作用を呈し夫れと共に破綻されたる血管は他の血管と吻合するを以て止血するに至る而して毛細管等に生じたる出血は殊に容易なりとす然れ共大血管を截斷したる場合に於ては到底不可能なるものと知るべし

(乙) 内部原因に在りても右の理由と同様にして其程度に由りて見解を

異にせざるべからず譬ば子宮出血又は咯血等に在りては他覺的症候著明なるを以て何人にも了解され且つ其原因も推知され易きものなれ共腦出血等に在りては出血の結果として一定症候を呈するが故に之れを防禦する事甚だ困難とす蓋し本症の特徴として多くは出血するや直ちに人事不省となるを以て殊に然り故に出血後に於て其損傷を蒙りたる組織の再生乃至増生新生等の作用を速むるの手段に出るの外他に術なきものとす何んとなれば既に出血せるや直ちに其周圍の組織は破壊さるゝが故に之れが止血を爲したればとて當初に於て蒙りし組織の損傷は癒すべきものにあらざるなり子宮出血咯血等は出血爲したればとて往々他に著しく損害を醸さず故に止血をすれば良好なる経過をとるものとすされど腦出血に在りては既に論じたる如く病竈を印せしを以て甚だ困難なりとす之れが病理及び治療法は第四編第拾參章を参照すべし而して本症の療法は重きを運動に置くものなりとす即ち運動自在の暗示觀念を固執せしめ其練習を反覆せ

しむるに在り然る時は神經及び他の必要運動になる組織は下の如く作用を惹起するものとす
 凡そ神經及び總ての細胞は他より養はるゝものに非ずして自ら養ふものなりとはウイルヒヨウ氏の持論にして諸家亦之れに賞賛するが如く果して然らば吾人が運動に注意を凝集する時は其細胞の興奮若大となり隨て自養の力を増進するや理の解し易き所なりされど組織に一旦破壊を生じたるものなるが故に通常(出血前)の如く機能を回復せしむるや否哉は蓋し問題なりとす而して此等も亦出血の程度及び局所に由りて決定せざるべからず即ち輕症にありては全々回復爲さざるとも補填作用に由りて患者運動に毫も故障無きに至ること在此等を以て回復爲せしと見做すも敢て差支無きものとす亦稀には缺損部に増生作用の行はれて全く舊状態に復歸する者無しとせず例令腦出血に罹り多年半身不隨に陥り久しく治療を廢し居たる者が自然に運動を復起し遂に健人と同様に爲りし者あるを見受けしは吾人二

三にして止らずされど重病に在りて全く新生再生等の作用を營爲するの餘地を與へざる者あり然れ共或程度運動機能の回復若しくは新生の許す限り迄は輕快爲すは必然の理なり

(3) 貧血を別ちて局所貧血と全身貧血と爲す前者は暗示感念に由りて最も迅速に回復するものとす(本症の病理及び療法は第四編第拾參章を参照すべし)

凡そ血液循環の原因は要するに大動脈及び肺動脈の血液と兩大靜脈及び四條肺靜脈との間に存する壓力の差に在り乃ち血脈は間斷なく閉鎖血管系統中の低壓部に向つて流通し其壓力の差大なる時は從つて流動亦盛なり(一朝此差を失ふ時は死後の如し)是れ一般に唱ふる生理説なり然れ共病的に在りては種々なる原因に由りて發起す(第四編第拾參章を参照すべし)而して之れが暗示觀念に由りて回復は即ち吾人の注意凝集したる部分には其細胞の興奮著大と爲るが故に隨て血液吸率旺盛となり遂に其不足を補填するに至るものなり

(4) 腦充血は腦貧血の反對現象にして(第四編第拾參章を参照すべし)之れが回復は下の二様に見ざる可からず一血管神經其細胞動作の緩徐と爲るを以て血液輸送の之れに伴隨及び局所的禁止作用の行はる、こと二靜脈の血行旺盛となり血量の平均を保持するに至らざるもの更に根元に遡りて赤血球の増殖に因する場合と雖も唯是れ禁止すれば足れり(病理療法は第四編第拾參章を参照すべし)蓋し以上の解釋は吾人の憶側に過ぎざると雖も實際上に於て吾人の觀念に由りて身體局所の血量を左右爲し得べきことは血液含量計に由りて證明され在るものにして又直接肉眼的に該作用を實驗し且つ之れを認知することを得るなり例令感動に由りて顔面蒼白或は紅潮等を發呈すること是れなり斯の如きは何人も常に經驗せる所の事實なりとす

(5) 脊髄癆本症が暗示に由りて治癒爲すと唱ふれば醫學者及び醫師の多くは直ちに疑惑を生じ若しくは該説を虛妄として誣ふるに在るなり然り通常の成書のみに據る者は之れを排斥せんとするは敢て無理

ならざるなり然れ共是れ一を知りて十を知らざるの論者にして抑も該疾患の解剖的變化は脊髓後索の硬結變性にあれ又脊髓前角の神経節細胞の萎縮にあれ詳論は第四編第拾四章を参照すべし又筋肉の變調にあれ結局患者の最も困難とする所は走行不能爲るを以てなり而して之れが療法としては走行隨意の暗示觀念を抱持せしめ以て走行を練習せしむるに在り其結果として生ずる處の回復は下の理由に據るものとす

暗示觀念は直ちに其局所神経細胞の興奮となり次に筋肉及び靭帶膜、血行等に影響し次で走行に必要な調節を作營するに在り或る學者は神経細胞に在りては増生、再生等の作用を呈せざるものとす然れ共是れ非なり何んとなれば吾人が生誕時より青年に至り又中年に至る此經過中に於て身體の發育及び知識の發達等は即ち是増生作用の標型なり又吾人が頭腦の或一部を損傷挫傷乃至截除すると雖も精神に限局的禁止作用を認めず是れ再生に非ざれば補填作

用なり凡そ本症の根本的治癒は現下の醫學之れを教へず其多く採る處は有意的運動療法にして諸家亦之れを賞讃す而して該療法の效顯在る所以は其運動機能の増生乃至再生或は補填作用等に基頼するものにして即ち暗示觀念(走行自由)と共に走行練習を遂行する時は通常醫師の賞讃せる運動療法に數倍の效力を増加するは理の解し易き所ならん

(6) 脊髄炎本症の病理は第四編第拾四章を参照すべし而して一般炎なる義解は紛々として未だ一定せざるが如しと雖も之れを營養機能の障礙に歸せんとする者ウユルヒヨネ氏及び此門派の主張する處なりされど之れを駁論する者亦尠しとせず然れ共該説は絶對的に否認す可からざるは蓋し濫賢なる學者の見解なりとす(第壹編第五章を参照すべし)而して本症に罹りし者の最も困難を感ずる所は前項と同様即ち走行不隨に在るを以て治療の目的も亦同様なり即ち走行自由の暗示觀念と共に其練習を遂行するにあり理由も亦運動機能の増生、再生

乃至補填作用等に歸着するものなり

(7) 三叉神經痛 偏頭痛 頸後頭神經痛 胸叢神經痛 橫隔膜神經痛 肋間神經痛 乳房神經痛 腰叢神經痛 坐骨神經痛等其他總ての疼

痛は本章の(1)に於て論せし理由に基着するものとす

(8) 痙攣症 本症の原因は種多にして決して單純に非ざるなり而し其の根元に遡て見る時は左の二要素の存在を假定され得べきものとす即ち一緊張、他は萎縮、換言すれば開閉の二要素是れなり通常健康體に在りては該要素機能が平均状態を保ち以て作營爲し在るもの吾人の所謂痙攣を發起せしと稱する場合は右の調節を破壊されしものにして即ち萎縮要素の衰弱に由るか或は緊張要素の興奮増大に因するかに由るを以て暗示觀念は一方に於て興奮を制止し他方に於ては衰弱を回復せしむるにあるなり

(9) 痙攣は痙攣の反對現象として認むべきものなり(知覺脱失は往々痙攣に隨伴する場合在りと雖も是れ一般の現象に非ざるなり)本症の回

復するや其理亦痙攣に於ける反對作用即ち一方に於て萎縮要素を興奮せしめ他方に於ては緊張要素を制止するにあり(顔面神經痙攣 眼筋痙攣 三叉神經運動痙攣 舌下神經痙攣 鋸筋痙攣其他總ての痙攣)而して知覺鈍麻疼痛缺亡、知覺異常等も本症に略近きものとす
(10) 舞蹈病は腦皮質の運動區域に存し患者意思を以て之れを抑制爲し能はざる最高度の自働的運動なるを以て暗示觀念に由りて之れを抑制するにあり

(11) 癲癇の原因も種多在り(第四編第拾八章を参照すべし)就中歇私的里性に在りては最も効果顯著なりとす而して本症は腦膜の痙攣に由來するを以て暗示觀念奏効の理由は一般痙攣症に於けるものと同様なるべし

(12) 神經衰弱 本症の原因亦種多なりとす(第四編第拾九章を参照すべし)而して神經衰弱夫れ自己は腦の營養不良に歸着するものなるを以て暗示觀念は之れを回復爲さしむる所の刺戟と見做すべし

(13) 歇私的里症狀の多くは所謂自働暗示に依りて構成するものなるが故に患者の有する自働暗示を打破し更に其者に有益治癒なる自働暗示を附與するにあり換言すれば不利益なる自働暗示を有益なる自働と交換せしむるに在り蓋し一方には神經障礙をも物理的に之れを認めざるべからず要するに暗示觀念は彼れの心氣を一轉せしむるを以て茲に自然良能を迅速爲らしむるに至るものなり

(14) 喘息本症の原因は第四編第貳拾壹章に述せり而して其何れに在るも喘息發作の場合は氣管枝に痙攣を發起するものとす故に暗示觀は之れを防禦し且つ抑制するに在り其理由痙攣症に倣ふべし

(15) 痙咳の主徴は笛聲を帶ぶる吸息を以て斷續的痙攣狀咳嗽を發呈す(第四編第貳拾壹章を參照すべし)而して痙攣は管に催眠せしのみ在りても鎮靜するものとす何んとなれば既に一般痙攣症に於て陳述せし如く緊張要素の強劇興奮は自ら鎮靜に至るを以てなり咳嗽も亦之れに隨伴す暗示觀念の奏効理由は咽頭喉頭氣管枝及び氣管枝粘膜の「炎」

を防止し且つ其刺戟症狀を除去するが故なり

(16) 急性胃加答兒本症の原因其種甚だ多しとす第四編第貳拾壹章を參照すべし而して胃加答兒は多く粘液を分泌するを常とす暗示觀念に由りて奏効するは即ち消化作用を嵩め且つ分泌を適當ならしむるを以てなり胃と觀念の關連は最も著明なるものにして例之青梅を食せし談を聽けば直ちに漿液の分泌を旺盛ならしめ又不潔なる話を聽く時は悪心を來し胃部に壓重或は緊滿乃至膨脹等を起し遂に嘔吐を催す者あり其他兩者の關係を立證すべきもの多々なり

(17) 胃擴張は第四編第貳拾壹章を參照すべし胃加答兒に於て陳述せし如く暗示觀念の能く之れを回復に導くものなりとす而して本症が潰瘍に基因せる癥痕性狹窄即ち癌腫性狹窄にあらざる限りは胃壁の弛緩にまれ幽門部の痙攣にまれ十二指腸上部の狹窄にまれ若しくは閉塞にまれ暗示觀念に由りて癒するは上來の理由に依りて推測され得べきものなり

(18) 胃痛原因多々なりと雖も疼痛其物は心理上のものなるを以て之れを癒するは疼痛の條下に由りて明かなり

(19) 癱瘓質斯は第四編第貳拾貳章を参照すべし疼痛其主徴として炎之れに隨伴するものとす而し漸々慢性に至る時は患部に強直狀を呈す(但し關節炎)暗示觀念に由りて疼痛及び炎を奪ふは既に論述せし理由に依るものなり蓋し強直狀を癒する上に於ては理由下の二種とす(一)疼痛を虞れ運動を爲さざること久しきに涉り遂に其關節面及び周圍に靱帶及び膜、筋肉等の癒着爲し恰もセメントにて固製したるが如き者(二)運動すれば忽ち疼痛激感を覺ゆるを以て可成的運動を爲さず從て之れを厭ひ遂に自ら運動不能なるものと思惟し一時的運動機の萎縮せしものにして未だ關節癒着に陥らざる者等是れなり(一)は唯暗示觀念のみにては直接奏効を見ざるものとす何んとなれば既に解剖的變化の多大なるを以てなり故に該症は先づ疼痛を奪ひ而して後ち徐徐に患部を矯正するにあり此場合に於ても暗示觀念は有効なるのみ

ならず筋肉、其他の組織を柔軟ならしむるにも亦與りて力あり(二)解剖上の變化大ならずして機能の萎縮等に在るものは暗示觀念に由りて直ちに興奮し以て即時に回復す以上の理由は管に本症にのみ限らず他に之れと類似したる疾患治癒の説明にも亦應用され得べきものなり

(20) 脚氣本症は第四編第貳拾貳章を参照すべし痲痺其主徴として現はれ次に心悸亢進、便秘、浮腫等を呈す而して痲痺の消散は一般痲痺症に於て陳述したる如くなり次に心悸亢進も亦日常の經驗に於て觀念と心臟の關連を認むるは強ち困難ならず例之心配すれば鼓動の嵩まるに在り又憤怒或は恐怖等の感情状態に於ても屢々經驗する所の實際的問題とす蓋し安心すれば鎮靜爲すは即ち暗示觀念の之れを静め得べき理の解し易き所なり便秘は便通暗示觀念に由りて腸に蠕動を將起するを以て排糞を容易ならしむるにあり浮腫消散の暗示觀念は其吸收力を興奮せしむる所の刺激と爲るなり爰に一節あり即ち次の如

し
脚氣症の原因は未だ詳ならずと雖も細菌説は近來動物試験又は小兒に於ける汁乳脚氣等に由りて漸々其根據を得るに至れり該説に拘泥する者は曰く暗示觀念に由りて其一部の症候機能的に屬すものは消散すると雖も決して根治には非ざるなり是れ即ち本症の原因が細菌に在るを以て如何に暗示觀念に由ると雖も瞬時に於て細菌其物を滅殺することは到底不可能なるものなりと然り本症の原因が果して細菌に在るものとせんか是れ益々興味ある研究問題なりとす左れど未だ脚氣菌の何物たるやは詳かならず或學者は原因を末梢神經に屬望す殊に英國の學派に於て然り假に多數論に依りて細菌と爲すも暗示觀念の奏効を見ざると言ふ謂れ無きものとす何んとなれば本症は細菌に屬するものと雖も虎列刺、赤痢、窒扶質「ベスト」、麻拉利亞等の如く猛烈なるものに非ずして多くは徐々に來るものにして急性衝心性脚氣に在りても前者の如く激烈瞬時に斃る、者尠し之れに由りて觀るも

脚氣の細菌は比較的虛弱なるものと推定爲し得べきなり患者往々冷氣に向ふと共に本症は自然に消退す又轉地療法の本症に特效在るは何人も否定せず其奏効の所以著者未だ之れを知らず唯事實に信賴するのみ何んとなれば土地高燥にして而も乾燥なるが上に空氣の流通光線の射入等衛生上最も適切なる土地に居住せるものに在りて本症に罹り例之東京に在りては山の手し者が王子、赤羽若しくは品川大森邊に轉地し以て治癒する者あり是れ土地の上より見る時は最も低地にして而も濕潤なるにあり又海邊に轉地して病を癒する者あり抑も海邊は概して氣候平等にして激變を呈せざるは良とするも其濕潤なるは必ずしも適當爲らず反て寄生蟲を繁殖せしむるに一部の便宜を與ふるものとす又轉地を山地に望むは通例なりと雖も是れ必ずしも適切に非ず即ち山地清涼の氣は頗る爽快爲らしむるに堪ゆるも往々乾燥に過るものなり習慣は異例本症が氣候風土等に關係を有するは勿論なりと雖も必ずしも高燥なる土地に移轉したればとて生涯脚氣

に犯されざるものと断定すべからず(飛驒、信濃、甲斐、其他高燥なる地に於て本症に罹る者尠しとせず)以上事實に由りて觀れば轉地療法の効蹟は蓋し那邊に求むべきか是れ一の疑問なりとす余は恐らく次の理由が治癒の原因に大なる關係を有するものと推測す
即ち轉地すれば必ず治癒すべきものとの觀念是れなり蓋し自宅療養者に在りても治療を怠らざれば必ず治癒すべきものとの觀念は何人も抱持するものなりと雖も其精神内容に於て若し癒せざれば轉地するとの弱意の潜伏せるが故に實際轉地爲せし時の如く意思の鞏固(必ず治癒と安心の状態に至らざるなり、往々灸點又は禁厭等に由りて治し或は稀には更に何等の治療をも施さざるにも拘らず自然に癒する者すらあり

既に論じたる如く觀念の及ぼす影響は至大なるものにして猛烈に非ざる細菌は之れを滅殺するに難からず假に一步を譲りて滅殺は難しとするも細菌に對する抵抗力を増進せしむるは敢て困難ならざるものとす例之窒扶斯流行時に於て健康者の糞便より窒扶質菌を發見することあり是れ其者の腸線が健全なるを以て能く「バチルス」に抗抵し所謂戰勝を得たるものとす或は人謂はん「開は免疫質の者なり然り一方より考察する時は先天性免疫質の者ならんされど免疫質を有せざる者に非ざれば必ず傳染せざるものと断定すべからず何となれば免疫質として有せざると雖も腸臓器の完全的健康なる者に在りては常に抗毒作用の營まれ居る者とす此場合にありては彼れは免疫質を有せしものと認せんか若し或る原因に由りて一朝腸の健康を害したる時には窒扶斯菌は無遠慮にドシ／＼繁殖し病毒は絶えず組織に吸収し遂に危重の病態に陥るや亦理の解し易き所とす故に一回免疫したればとて之れを以て直ちに免疫質の者と斷案を下すべからざるや明なり而して所謂抗毒質と稱する一種の作用は果して吾人に具備せるものや否やは未だ確乎たる基礎を得ず是れ畢竟するに何種を問はず「バチルス」の侵入せし其局所に於て抗抵猛烈なる時は生存競争の結果

として強者の勝を得るは必然の理なり
其他癩病の素因を有する者に在りても必ず其癩病桿菌に襲はる、もの
と一定せず例之患者の祖父が該症に罹りたるも其子即ち患者の親
なる者は更に病毒に犯されず然るに第三者に在りて病態に陥りたる
とせよ此場合に於ても之れが素因を遺傳に歸するものとす然る時は
患者の親なる者は病毒の遺傳を受けざりしに在るやと謂ふに否らず
即ち患者同様に遺傳を受けしものなり或は患者に比すれば一層強度
なりしやも計られず若し其親に遺傳せざりしとせば病魔は患者の親
に於て斷絶せしものと見做すを得されど實際遺傳を受けたるを以て
第三者に亦之れを遺傳したるに在るなり斯る場合に在りては諸家多
くは次の如くに解釋するにあり即ち患者の親なる者は患者と均しく
癩病の遺傳を受けし者なりと雖も所謂抗毒質の發揚旺盛なるが故に
其病魔に襲れざりしなり又一説に遺傳とは疾病其物を遺傳爲すに非
ずして其素因を遺傳するに在り換言すれば病毒の染浸爲し易き身體

組織を遺傳せしに在りと謂ふ余は後説を信するものなれ共癩病の如
きに至りては當に素因のみならず疾病其物を遺傳せしやの如く疑ふ
何となれば該系統を有するものは衛生に攝生に常に注意を拂ひ殊に
傳染等に於ては最も然り左るにも拘はらず往々病魔に襲る、こと尠
とせず以上の事實より推測する時は或は抗毒作用に依りて病魔を壓
殺し得るものとの説は此場合に於ては妥當ならざるやにあり而して
其何れの説にありても對病魔に抗抵力の必要は均しく是認する所な
れば結局局所乃至全身に對する害毒に徹頭徹尾抗抵し得るだけの組
織に力を有する者は「バチルス」に侵入さる、も又素因の遺傳を有する
も其健康上差したる障礙を醸さるゝることに歸着するなり故に余は次
の如く推測す
即ち抗毒作用の發揚旺盛なるが故に「バチルス」の生活に必要な營
養供給を杜絶するを以て「バチルス」自個に於て遂に餓死するの止を
得ざるに至るものとす

上、來、陳、述、せ、し、如、く、抗、毒、作、用、旺、盛、な、る、に、在、り、て、は、バ、チ、ル、ス、を、し、て、餓、死、せ、し、む、る、に、足、る、は、疑、を、容、る、餘、地、な、し、と、す、果、し、て、然、ら、ば、暗、示、觀、念、に、由、り、て、脚、氣、症、の、治、癒、す、べ、き、理、由、も、亦、解、し、易、き、所、な、り、

(21) 月・經・閉・止の原因は種多あり(第四編第貳拾參章を参照すべし)而して暗・示・觀・念に由りて之れが調順整然たらしむる所以は即ち子宮粘膜炎變化を催起し其顫毛上皮の剝脱するに至るものなり人精神感動に由りて月經閉止することあり此一事より推すも理の解されべきものなり

(22) 月・經・過・多本症は(2)止血の項に於て論じたるを以て茲に省略す左れど理由は月經閉止と正反對なり)

(23) 月・經・困・難は第四編第貳拾參章を参照すべし暗・示・觀・念(月經容易)即ち卵巢神經中樞を刺戟するが故に之れが反射として動脈性充血を催進して子宮粘膜炎の出血を容易ならしむるにあり

(24) 月・經・痛は(1)疼痛の項を参照すべし疼痛は原因如何に依らず總て心

理上のものとす

(25) 交・接・痛亦同様なり

(26) 陰・莖・萎・縮は種々の原因に由りて將來す第四編第貳拾參章を参照すべし而して陰莖勃起は精神機能觀念と多大の關係を有するや著明なり人淫事を思想するや往々陰莖勃起するに至る之れに由りて見るも亦證するに足れり即ち暗・示・觀・念に由りて之れが回復を導くは下の如くなり(一)勃起神經を興奮せしめ(二)其動脈を擴張し血液の輸入を多量ならしむるにあり

(27) 早・漏・症は一種の知覺過敏に過ぎず暗・示・觀・念に由りて之れを鎮靜ならしむるにあり

(28) 遺・精は往々色情の興奮に因すると又は神經衰弱とに由りて將起するを以て暗・示・觀・念の能く癒せしむるや理の解し易き所とす

(29) 遺・尿は暗・示・觀・念に由りて豫期作用(排尿)を高め亦一方に於ては其神經作用を調節爲すにあり(第四編第貳拾參章を参照すべし)

(30) 近視眼は眼調節の變態を矯正するに在り
 (31) 遠視眼も亦近視眼と同一理由に依るものとす
 (32) 斜視は多く眼筋痙攣に因するものなるを以て其理由は一般痙攣症に於て陳述せし如くなり然れ共稀には他の原因に由ることあれば本説は一般の斜視を説明するに不完全なり故に其原因に由來し以て上來の説明法を適宜に應用すべし

第四編 病理各論及び一般の治療法

竝に暗示法

第拾參章 (腦疾患) 腦出血……………卒中

是れ腦實質の出血なり然れども「アポブレキシ」の字義は卒倒にして蓋し其著明なる徴候を謂ふに過ぎず故に茲には唯腦出血の主徴と爲る者を論述して腦軟化等の經過中に發する證候的出血を記載せず

原因 腦出血の主たる原因は腦血管の所患に由るものなり即ち「シャルコー」及「ブッシャー」兩氏の初めて徵明したるが如く腦出血患者に於ては常に細小の腦血管に粟粒動脈瘤を發見するものにして或る誘因に由りて其破裂を來たすときは此症を起す而して此粟粒動脈瘤は其大さ一密迷乃至稍々其以上に達し多くは紡錘形を有し屢々多數に發生することあり蓋し此動脈瘤は腦血管の變性殊に粥樣變性に基因して

起るものとす又稀れには中等大なる血管の動脈瘤破裂して腦出管を發することあり

誘因は大動脈不全閉鎖萎縮腎大なる動脈の粥樣性等に於ける血壓の亢進なり又一時の心臟機能旺盛も其誘因となる例之精神の興奮酒精の濫用過劇の勞働等是れなり

其他往々冷浴強劇の努力咳嗽等に由りて此症を誘發すること在り又白血病惡性貧血紫斑病等は出血の素因を爲すものなり

凡そ卒中を發するの年齢は大抵四十歳以後に在りとす婦人には寡なし而して一回之れに罹り恢復するも亦屢々之れを反復す多くは其遺傳を證明することあり

解剖所見 血管殊に腦底は通常疾患に罹りて粟粒動脈瘤を呈す而して大抵一箇の出血竈(同時に數箇の出血竈を發生するは罕なり)を見るものにして其大さ甚だ種々なりと雖も大約榛實大乃至胡桃大なるを多しとす而して出血部の腦質は毀損せられ且つ血液を混じて血色

の糜粥樣物に變じ其周圍の腦質は屢々血性或は漿液性滲潤を起し若しくば吸収に由りて類黄色を呈す其最も屢々侵さる、部分は線狀體(レ。ン。ス。核。視。床。體。次。ぎ。に。爾。餘。の。大。腦。な。り。延。髓。及。び。小。腦。に。來。た。る。は。稀。れ。な。り。腦。室。の。周。圍。に。起。る。出。血。は。往。々。其。室。腔。中。に。潰。決。し。て。殊。に。廣。大。な。る。を。常。と。す。

腦質内の大なる出血に於ては硬腦膜緊張し腦迴轉著しく扁質内の腦溝狹隘と爲る

出血後尙久しく生命を保存するときは出血竈に多少の變化を來たすものなり即ち初め其流動分吸收せられ爾後其周圍に色素を蓄積し且つ結締組織を新生す此の如く小なる出血は全く消失して唯卒中性癥痕を殘賸するのみ然れ共大なる出血に在りては其空間は漿液を充盈し其周圍に黄色若しくば褐色を呈する結締組織性被膜を有す之れを卒中性囊腫と稱す
腦皮質に於ける出血は遂に其部をして軟腦膜の癒着せしむ甚だ稀れ

には溢血及び毀損せる腦質の乾酪様變性を起し又出血竈の周圍に膿瘍及び軟化を發すること有り
出血竈の周圍に於ては通常爾後の經過中に腦質の萎縮を來たし間々廣大の部分に延及することあり若し圓錐體徑路の走行中或る一部破損せらるゝときは往々此病竈より纖維の方行に従つて續發性下行變性を發し腦脚アロルス橋及び延髓を経て脊髓に擴延するものなり
其病候暫時にして消失する所の毛細管出血は稀なるも尙之れを見ることあり而して大に腦充血に類似す

症候 前驅症は往々缺如することありと雖も多くは腦充血に於て見るが如き病狀腦充血の條下を參照すべしを呈す而して其出血の症狀は通常俄然卒中發作を以て始まり數秒時間に於て全く人事不省となる又屢々諸症稍々漸發して人事不省となるに先ち患者は自ら臥床に上り或は家人等を喚て其介保を需め得ること有り危重の卒中發作に於ては雷に一切の感覺及び隨意運動を消失するのみならず初起に

在りても亦反射運動を缺如し唯呼吸と血行の兩機能を保續するのみ而して顔面屢々潮紅し呼吸に鼾聲を放ち半ば口を開き然るときは呼吸の際に頰部膨出せられ脈搏緊張し往々少しく緩徐となり頸動脈の搏動著しく旺盛すること間々是れ在り時としては不隨意に大小便を排泄す屢々人事不省中に於て已に半身不隨を認知すること有り即ち一側の上下肢は他側に比すれば著しく弛緩し或は顔面少しく健側に牽引せらるゝを見るもの是れなり又或場合に在りては卒中發作中に痙攣若しくは痙攣性筋強直を發することあり是れ殊に廣大の出血其他出血の腦室内に潰決するときに於て見る所なり
卒中發作中に往々死を致すことありと雖も多くは其發作後數時間若しくは數日を経て精神徐々に醒覺するものなり細小の出血に於ては人事全く不省に至らざるか或は其持續時間甚だ短し又卒中發作の漸發すること有り即ち先づ眩暈眼花談話困難一側上下肢の軟弱嘔吐等を發し而して數時若しくは數日の經過中に於て人事全く不省と爲る

蓋し斯の如き經過は出血甚だ緩慢にして且つ初めて僅微なるも徐々に増大するに基因するものなり初發の症狀と完全の卒中發作との間に數日乃至數月の間歇時を有すること往々これあり
 精神醒覺する時は局處の症候著明となり大抵出血の反對側に於て不隨を呈し且つ出血の部位大小に従つて他の症狀例之失語を併發す時として此際所謂反應炎症即ち中等の發熱、頭痛、譫語稀れには局處或は瀰漫性痙攣を來たすことあり而して爾後の經過中に於ては局處症狀輕快し時として殆ど消失す若し數月の經過中に於て著しき輕快を見ざる時は概して其望み無きものとす
 已下出血の部位に關して起る症狀所謂局處症狀を略述すべし大凡痙攣は出血の反對側に來るものなり例之右側出血に於ては痙攣左側に在り而して出血の線狀體及びレンス核に局在するものは通常下顏面神經、舌下神經、軀幹及び四肢の痙攣を致す者にして膀胱、直腸は異常無し亦出血と同側なる痙攣を來すことあるも極めて稀有に屬すものなり

り視床體のみに出血するときは痙攣を發することなし腦皮質中の出血は古來の經驗に據れば顏面神經、舌下神經、四肢の痙攣及び失語を見るのみ髓質中の出血は屢々出血症狀を呈せずして經過することあり痙攣の兩側に涉る者は多くは延髓、ワロルス橋の出血に由る就中ワロルス橋の出血は動もすれば死を致すことあり若し出血ワロルス橋の上部に有る時は他側の痙攣を起し下部に在る時は交叉性痙攣を起す之れを約言すれば四肢は反對側、顔面は同側に於て痙攣するものなり又痙攣は四肢のみを襲ふことあり或は然らざることあり延髓の出血は多くは即時に死す若し幸に之れを免かれるときは痙攣を來すこと各人に極めて差異ありとす而して屢々蜜尿病、迷走神經障礙の症狀を呈す小腦の出血は嘔吐、歩行踉蹌或は廻旋す其多くは灰白質を侵さるる時に於て然り痙攣せる四肢に於て屢々共同運動を起すことあり是れ健側の反射的及び隨意的運動より爲す然れとも共同運動に就ては例規無きものなり腱反射は患側に於て亢進し攣縮は概ね發病數箇月

の後にして多くは上肢に在り即ち關節屈曲し手關節屈曲及び内轉す斯くて此攣縮は漸々劇症に達し遂に全く屈伸すべからざるに至る(下行變性を起すときには之れを見る外、癱及び其周圍の出血は、舞蹈病に類似せる運動を起すものなり)癱痺せる筋の電氣反應機は數月間全く變換せずと雖も其興奮性の漸く沈降するを見ること屢々之れ在り(末梢性癱痺に異なる所なし)知覺機は出血後一旦癱痺せる部に於て減退すと雖も、レンス核及び視床體の後部損害せざる時は殆ど舊に復せんとし或は全く舊に復す又知覺過敏となるは稀れなり

疼痛は多く反應期炎に於て起るものにして爾後に於けるは極めて罕れなり
癱痺せる四肢は其初め健康時に比すれば溫暖にして且つ赤色なるも(時としては水腫様なる在り而して患側は赤血球に富む)後には蒼白色を呈し且つ厥冷す該側は瘦削し脈搏細小と爲る又急性痔瘡關節炎、爪甲の衰耗等を致すこと在り

精神障害は稀れなりと雖も精神自ら痴鈍と爲り健忘及び言語不明等を遺すこと在り殊に發作の反復するときに於て然り

豫後 發作中或は發作後直ちに死に陥らざる者は一旦少しく緩解を覺ゆ然れ共第一週の終り若しくは第二週の初めに至り反應期炎に由りて斃る、こと在り或は心臟衰弱を來して危篤に至ることあり(肺水腫を發して死す)殊に酒客に於ては通常豫後不良なりとす之れに次で危重なるは異物性肺炎、嚔下肺炎の續發是れなり此症に於ては體温の亢進著明ならざること、在り若し以上の危険症を發せざる時は壯年の人は高齢の人に比すれば其豫後概ね佳良なり體温の三十九度乃至其以上に達し腦孔の癱瘳甚だしく且つ脈搏頻數と爲る者は危険なり全身痙攣も亦然り是れ出血腦室内に破開するの徴なり

療法 豫防を專一とし遺傳神經病の傾向有る者或は一回卒中を患ふる者に於ては必ず先づ其誘因を防禦すべし即ち飲酒を戒め劇しき精神の興奮及び過度の勞働を慎むべし

發作の際に當りて其患者強壯にして脈搏緊張し顔面赤色、頸動脈強き搏動を呈するときは耳後に水蛭を貼し又は芥子脚湯、芥子末一回の量六〇〇乃至一〇〇〇を用ゆ、或は下肢に芥子泥を貼し熱脚浴を施し而して患者を安靜に保持し兩便の通利を促し若し脈搏微弱にして呼吸不整と爲り患者虚憊せるときは麝香(〇一一)一回の量を投すべし幸に嚙下に妨げなきときは強葡萄酒、茶、珈琲、肉羹汁等と與ふ其他發作中は頭部に氷罨法を施し冷水を胸廓に灌注すべし之れに由りて患者の呼吸を深大にせんことを要す其發作消退する時は極めて安靜を旨とすべし此時に於ては他藥は不能強て與ふれば唯強壯劑に在るのみ體温亢進する時は速に頭部に氷囊を貼し且つ胸腹に冷罨法を施すべし催眠術は發病十日乃至二週間の後に於て施すべし患者若し頭疼強劇にして且つ不眠を起す時は先に頭疼消散の暗示を施し該暗示の成功したる後に於て睡眠可能の暗示をすべし若し頭疼寛解せざる場合に於て睡眠暗示を爲すと雖も多くは無効に屬すこと

と在り

痲痺には從來平流電氣を以て最も優等なる法なりとす然れ共是れ恐らく催眠暗示に及ばざるものなり該暗示は痲痺消散することの意味にて可なり

運動不能若しくは不隨該患者に對しての暗示汝は今運動隨意たることを得るなり既に得たり隨意に運動すべき人と爲れり此ことを強く觀念すべし強く々々と再三再四該暗示を反復し置き然る後其運動を實行せしむべし斯くて運動の實行出來ざる者には術者が補助し以て運動を爲さしむるべし然れ共此場合に在りても必ず他動的に爲さ一動一舉意志的に爲さしむるを要す而して其運動も亦準序的に爲さしむるを要す(例之半身不隨意なる者は先に上肢屈伸、上下、左右、廻轉、下肢に在りても同様加るに走行の練習を爲さしむ)此運動は患者の疲勞せざる範圍に於て止むるべし
言語不調は可能暗示を與へ發音の練習をすべし

以上の如く暗示を數日若しくは數月間繼續する時は漸次快方に赴くものなり

腦貧血

原因 腦全部の貧血は兩側の頸動脈結紮多量の血液消失或は概ね體液を缺乏せしむる諸病(例之強劇の下痢、腦血管の痙攣、驚愕、畏怖、惡心、憤怒、カテーテル挿入、多くの胃病等に於て)體中の他部に多量の血液滲漉する症(激動、急遽の分娩等、重病の恢復期に於ける心臟の衰憊、頭蓋腔に血液及び他の液質の滲漏等に由來する者とす又全身の貧血及び諸種の惡液性、或は慢性及び急性の危重なる諸病殊に熱候を兼ねる者に於ては腦貧血を將來し易し其他平臥の位置より卒然起立の位置を取る時は一時腦貧血を來すこと屢々是れ在り小兒に於ては強劇の下痢に由りて急性腦水腫に類する危重の腦症を發すること有り之れを腦水腫様症と名く

腦局部の貧血は偏側の頸動脈結紮及び頸部の腫瘤より發するものと

す而して其頸動脈結紮に基因するものは唯一時のみ何んとなれば速に平均作用を得るに在ればなり

解剖所見 腦諸膜は大抵蒼白色にして血液に乏しく而して腦質も亦其色蒼白なり殊に灰白質に於て甚しきとす之れを切截するに血點は僅少にして且つ細微なり蜘蛛網膜下腔及び腦腔は屢々大量の漿液を蓄積す腦質は時として濕潤にして柔軟なることあり時には乾涸にして滑澤なることあり

症候 急性の腦貧血に於ては患者の卒倒するに由りて之れを徵知すべし其初め恐怖、耳鳴、眼花、惡心、乾嘔、下痢、下肢軟弱の感あり次で胸廓の絞窄を覺え冷汗淋漓遂に卒倒す此際瞳孔は初め縮小することあるも後ち常に散大し脈搏微弱と爲り顔面白色を帯び或る場合に在りては癲癇様痙攣を發することあり斯の如き諸症は概ね速に消散するものにして爲めに死を致すは罕なり然れ共失血症に於ける者は往々に陥ることあり

吐瀉病に罹る小兒に於ては往々其經過一二日内に腦貧血を起し爲めに腦腫様の病狀を顯すものにして即ち初めに啼泣し身體安からざる如く而して眠に就くを得ず體溫少しく亢進し次で安靜と爲り精神恍惚終に嗜眠と爲る腫孔は初め縮小するも後に散大す其脈は初め緩慢となるも後に頻數と爲り呼吸に鼾聲を放ち屢々死に歸することあり此際顛門凹窪し眼球陷沒す以上諸症の經過中に往々痙攣を發するを見る

慢性貧血に於ては精神的機能減弱殊に無慾精神痴嗜眠を呈す又此際屢々精神興奮を呈し以て光線及び音響に對する感覺過敏と爲り頭痛眩暈を來たし往々譫言を發す又身體を勞働する後に於て震惕を起し動もすれば則ち卒倒す

鑑識は其原因たる疾患或は患者の容貌に由りて之れを爲すことを得べし

局所貧血は稀に腫瘤等に由りて起り局所症狀を顯はす然れ共大抵著

しからず

療法

起立倚坐の際に發する所の卒倒症は直ちに之れを安臥せし

め或は新鮮の大氣を通暢せしむべし斯くする時は大抵藥せずして自ら醒覺するものなり其心力虛弱に由りて發するものは興奮劑即ち葡萄酒、咖啡、茶、肉羹汁等を與ふべし

小兒に於て腦水腫様症を呈する者は強壯劑葡萄酒を與へ殊に適當の營養を最も緊要なりとす(佳良の乳汁)

全身貧血に於ては鐵劑、肝油又は良好の食物乳汁及び概して完全なる攝生法に由りても治するに至る其他精神の過勞を禁ず

催眠、暗示、痲拉利亞より發する腦貧血は腦に血液分量の増加し以て通常即ち健康状態に復することの意味に於て屢々すべし

其他前記の原因に由る腦貧血は概ね右の意味に於ける暗示にて可とす然れ共茲に注意すべきは左に原因したるもの即ち十二指腸、巨口蟲是れなり尤も甚しき貧血にして他に之れが原因と見做すべきものを

證明する能はざる時は疑を之れに寄するべし而して此蟲は齒牙を備ふる口吻を以て十二指腸の粘膜を穿透し之れより血液を吸て生活するが故に其周圍の皮下に出血を見る斯くて該蟲繁殖する時は患者貧血と爲り全身の衰弱倦怠を覺え呼吸促進心悸亢進頭疼水腫等を發す其甚だしきに至りては死を致すことあり之れを驅除するの藥劑は驅蟲藥にして適當なるものを用ゆべし而して此場合に於ける催眠暗示は即ち驅蟲の意味に於てすべし一般の驅蟲劑としては醫家は下劑を投ず故に暗示も又此治則に倣ひ驅蟲と共に下劑暗示をすべし先づ驅蟲の後脳血量の恢復暗示を爲すを以て順序とす然らざれば無効なるのみならず反て危重に陥らしむる虞れあり

腦充血

腦充血を分ちて左の二種と爲す

(甲) 動脈性充血或は實質充血

(乙) 靜脈性充血或は鬱血

原因

實性腦充血は種々の原因に由りて起るものなり而して持續的實性腦充血は持久して心悸を充進せしむる諸症殊に心左室の肥大より來る又疾行登山の如き勞働に於て心臟機能を旺盛せしむる時は一時の腦充血を發する者なり其他精神感動(例せば喜悅憤怒羞恥)に在りても腦血管の擴張するに由りて一時之れを來すことあり又此症は酒精及び或る麻酔藥の應用に由りて起ることあり

(乙) 鬱血は頸靜脈の壓迫を受くるが爲めに頭蓋腔より血液の還流妨礙せらるゝに由りて起ることあり僧帽瓣及び三尖瓣の諸患若しくは靜脈系に鬱血を呈する肺患(例之肺氣腫稀には肺癆)強劇の咳嗽久時の身體屈曲も亦之れを將來することあり

解剖所見

生理學上腦諸膜は極めて血液に富むものにして其動脈性充血は死體を檢して之れを證すること極めて難し之れに反して靜脈性充血は頗る容易なりとす甚しき充血に兼ぬるに軟腦膜水腫蜘蛛下腔及び腦室内に水液の滯溜を認め且つ併せて腦水腫を見ることあり

り慢性の鬱血には軟腦膜肥厚し溷濁を呈し灰白質は帶赤色を現はす
髓質視床體及び線狀體に夥多の大なる血點あり其重症に於ては更に
無數の細小出血を見る

症候

急性充血に在りては頭部に温熱且つ血液の灌漑増加するを
覺ゆる而して顔面紅潮す時として缺如することもあり眩暈、壓重或は
搏動性頭痛、耳鳴、眼花、心悸、亢進、脈搏頻數、且つ患者頗る興奮となり精神
的及び身體的不安を發し不眠を將來す其危重症に於ては痙攣、譫言或
は全く發狂狀を現はし人事不省と爲る稀には半身不隨意を來たすこ
とありと雖も死を致すは極めて罕なりとす中等度の腦充血(學生の頭
痛は日本學生に於て屢々見る所なり)

鬱血に於ては頭部の壓重、耳鳴、眼花、倦怠、嗜眠等の症候を呈し精神を使
用することを嫌忌し皮膚青色を徵す鬱血は頗る慢性類似する症狀を
顯す(此二症は共に酸素に富む所の血液に闕乏す)而して腦水腫も之れ
に類するの病況あり

療法

平素強健なる人の極めて劇甚なる充血を起し其脈率實なる
者は左右の耳後に三十乃至四十條の水蛭を貼すべし其他頭部に寒冷
法(氷囊寒罨法冷水灌漑法)を施し又一方に於て強壯療法も貧血症の條
下を參照すべし施すべし

催眠暗示の血行旺盛して従つて血液は軀體の方へ潮流しノボセは
下るなり最早下りつゝ、在るなり顔色も亦餘程能くなりしなり該暗示
を再三再四反復し是が成功したる時は次の暗示をすべし兩便の通利
頗る佳良なり或は一時下痢を發すならん否必ず起すなり然れ共开は
一二回にして通常に復し爾來精神身體共に安靜となるなり斯くて全
癒したる曉は血液循環全く舊に復したり即ち全く治病したる者なり

第拾四章 脊髓諸病

第壹節 脊髓及び脊髓膜の出血

此症は大抵蜘蛛膜下腔或は骨質と硬腦膜の間に來たる出血にして罕

れには髄質内に起ることあり(脊髓出血)脊髓膜の出血は之れを脊髓膜卒中と稱す而して其血液は往々腦中に流入することあり

原因 概ね外傷強劇の脊髓突衝或は震盪或は脊椎の疾患或は動脈瘤の破裂又は勞役過度に由りて起る者とす時としては脊髓炎及び脊髓膜炎に繼發することあり

症候 (甲)脊髓膜の出血其症狀の強弱は出血に基因する神經根及び脊髓の壓迫の度に關するものなり而して初めて強劇の脊部疼痛四肢の知覺異常及び神經痛を發し又搖擗痙攣を來たす其劇症に於ては卒然截癱性の痲痺及び知覺鈍麻を起す而して出血は頸椎或は脊髓又は腰椎等に於て其發起する所に隨て症狀部分を異にす又充血、脊髓膜炎及び脊髓炎と鑑別すべし

豫後 出血の多少及び其部分に由りて頗る疑はしきものなりとす(乙)脊髓出血(脊髓卒中)出血以下の脊髓より主宰せらるる體部には迅速に完全の知覺鈍麻及び痲痺部を發起し其他膀胱及び直腸の痲痺するものなり次で急性痔瘡及び膀胱加答兒を發す若し全灰白質の破潰せらるるときは患部の反射機消滅す(出血は殆ど常に灰白質に起るものなり而して出血脊髓の末端に蔓延せざる時は反射機能現在す)又脊髓炎の經過中に出血する時は必ず之れに先ちて脊髓炎の症狀を呈するものなり偏側の出血に於ては同側に痲痺及び知覺過敏反對側には知覺鈍麻を來す

豫後 大抵不良なりと雖も往々治癒することあり

療法 安臥せしめ脊部及び肛圍に水蛭を貼し或は水囊を置く(但し其初發に於てす)
催眠暗示 痲痺消散、尿通利佳良、疼痛消散等總て對症暗示を適宜にすべし

脊髓炎

原因 感冒、身體過勞強劇の精神感動、房事過度、外傷等に基因し又脊椎内の腫瘤、腐骨疽等に繼發することあり稀れには上行性神經炎、或

は分泌歇止或は危険の傳染病即ち窒扶斯、痘瘡、猩紅熱、實扶的里等(微毒等より之れを將來す又其原因を詳にせざること往々是れあり)

解剖所見

初め患部に充血を起し隨て腫脹し次で軟化を徴す此軟化初め赤色にして後ち黄色となり終に灰白色に變ず其容積は萎小し隨て表面より陷凹す之れを顯微鏡下に檢するに分解せる神經纖維、神經細胞、小顆粒、ミエリン、球脂肪小滴を認む終に色素を混せる褐色或は灰白色の崩壞細胞を視るに至る其患部は或は散在性或は連續性にして多くは灰白質を侵すものなり又繼發の變性(硬化)を致すことあり(急性上行性脊髓炎あり)

症候

(甲)急性性脊髓炎の症候は時として卒然に起り時としては數時或は數日間惡寒、體溫昇進、食慾減退、不安、不眠等の如き普通の前兆症を呈する後ち知覺異常、搖蕩を起し病竈に當應する脊椎の局部に疼痛あり其疼痛は自然に起り或は脊椎の運動壓迫若しくは之れを敲打する等に由りて發起す又患者多くは疼痛部より頸椎若しくは胸を周圍す

る絞搾性感覺を訴ふること有り次で速に筋の痲痺を發す其痲痺は完全なる在り或は不完全なる在り又廣狹も患部の大小及び部位に關して自ら異なり則ち腰椎に於ける横斷性、脊髓炎に在りては下肢の截癱を來し膀胱及び直腸の痲痺を呈す、脊髓頸膨の疾患に於ては以上の症候を兼て上肢及び胸諸筋の痲痺を來す若し炎症頸椎の上部を侵す時は延髓球痲痺の症候を併發するものなり

痲痺せる筋の營養は久しく變常せざること有りと雖も終には廢用的萎縮を發す時として消瘦を來たすことあり

皮膚の知覺機に於ては初め或る一定の感覺のみ減弱し或は消失するも後ちには大抵完全の皮膚知覺鈍痲を起す

脈管運動神經の障害は殆ど常に見る所にして痲痺せる四肢は赤色及び溫暖を呈し而して久しく持續せる症に於ては蒼白色を現はし且つ厥冷す又屢々皮膚の浮腫及び關節の腫脹を見ること有り

營養の障害を發することは稀れならず則ち表皮落屑し紅斑、水泡性發

疹殊に急性瘡瘡を起す

反。射。機。の。關。係。は。種。々。な。り。則。ち。炎。症。腰。椎。に。來。る。と。き。は。全。く。消。失。す。脊。髓。の。上。部。に。占。居。す。る。病。竈。に。於。て。は。初。起。に。往。々。減。弱。し。若。し。く。ば。消。失。す。る。こ。と。あ。り。と。雖。も。後。に。は。大。抵。亢。進。す。而。し。て。炎。症。大。に。擴。延。す。る。時。は。再。び。消。失。す。る。も。の。な。り

尿。は。最。も。屢。々。重。要。な。る。變。化。を。現。は。す。即。ち。血。性。と。な。り。蛋。白。質。を。含。み。濁。す

膀。胱。及。び。直。腸。の。痙。攣。は。初。起。よ。り。來。り。或。は。爾。後。の。經。過。中。に。起。す。こ。と。在

經過

は。決。し。て。一。様。な。ら。ず。時。と。し。て。は。數。日。の。中。に。於。て。斃。る。こ。と。在。り。他。の。場。合。に。於。て。は。死。に。至。る。迄。數。日。を。費。す。こ。と。あ。り。然。れ。共。急。性。症。よ。り。慢。性。症。に。移。る。こ。と。亦。稀。れ。な。ら。ず

(乙)慢性症は知覺異常を以て起り往々之れに神経痛を併發すること有り多數の患者は脊椎に局在する疼痛及び帶狀感覺を訴ふ而して漸々

痙。攣。及。び。知。覺。鈍。麻。を。發。起。す。蓋。し。痙。攣。は。本。症。の。主。徵。と。し。て。且。つ。増。進。性。な。り。則。ち。初。め。に。運。動。の。際。容。易。に。疲。勞。し。後。に。は。軟。弱。と。な。り。遂。に。全。く。痙。攣。す。而。し。て。疼。痛。及。び。他。の。刺。戟。症。狀。に。超。過。す。疼。痛。は。屢。々。缺。如。す。る。こ。と。在。り。此。痙。攣。は。屢。々。一。側。に。於。て。甚。だ。し。き。こ。と。在。り。而。し。て。知。覺。鈍。麻。に。比。す。れば。強。劇。な。り。反。射。機。亢。進。し。て。脊。部。を。屈。す。れば。兩。足。震。顫。す。又。兩。脚。の。活。潑。な。る。痙。攣。狀。の。運。動。所。謂。脊。髓。癱。瘓。を。發。す。而。し。て。痙。攣。せ。る。筋。は。後。に。強。直。し。尋。ね。て。攣。縮。を。來。す。其。攣。縮。多。く。は。劇。甚。の。度。に。達。し。之。れ。を。展。伸。す。る。も。忽。ち。屈。曲。す。先。に。痙。攣。せ。る。四。肢。の。萎。縮。は。概。ね。輕。易。な。り。然。れ。共。時。と。し。て。は。強。劇。な。る。こ。と。在。り。熱。候。多。く。は。缺。如。す。膀。胱。痙。攣。は。屢。々。數。年。に。涉。る。も。の。な。り

經過

頗る緩慢にして通常熱候なし一時輕快に赴くこと有るも次

注意

慢性症壓迫性脊髓炎に於ては往々脚氣症と誤認あることあり

豫後 急性症は全く不良なり慢性症も亦全癒するの罕れなるが故に關係的に不良と謂はざるを得ず然れ共最近の研究によれば微毒インフルエンザ「ジフテリイ」等より發したる者は豫後漸々良好なるに在りと謂ふ

療法 急性症に在りては脊椎に氷嚢を置き劇熱を發する者には下熱劑を投じ極めて安臥せしめ且つ褥瘡を防ぐべし若し之れを發する時は速に其治を施すべし

慢性症には脊椎に強劇なる誘導法則ち平流電氣冷水療法、艾灸等を施すべし

催眠暗示、膀胱及び直腸の痙攣は消散せり從て排尿容易となれり下肢の痙攣も亦追消散するに至るなり既に本日一回の治療によりて餘程消散せり故に運動は従前に比すれば必ず容易と爲り居れりいざ走行すべし(走行不遂の者は仰臥の儘上下左右屈伸廻轉等を數回爲さしめ)大丈夫樂に爲りたり今余と共にすれば決して顛倒するが如きこと

は斷じてなきなり故に一步一步に注意して爲すべし而して走行の出來得る患者在りては其歩行は左の順序に倣ふて練習爲さしむるべし(一)□(二)○(三)△(四)~~~~(五)障害物を超さしめ(六)小溝を飛ばしめ即ち催眠中に於て運動療法を用ゆるものなり而して運動場は可成的廣地を要す右の線は板間若しくは土間へ白墨にて記し其上を走行せしむるも可なり

脊髄癆

原因 神經性の血族には少しく其素因を有すと雖も本症には遺傳頗る稀なりとす而して誘因は多く食酒房事過度精神及び身體の過勞分泌物の歇止就中足部の發汗閉止(但し本病の一症候なるの說在り)感冒等なり微毒は屢々本症の原因となることあり男子は女子より比較的多く殊に三十歳後に於て見る四十歳の後は更に多しとす神經末梢に起因する者は恐らく古人の憶測に過ぎざるべし(是れ神經伸展法にのみ效を奏する所以なり)

解剖所見

該症の特徴は後索の硬結性變性にして就中屢々ゴル氏索のみを襲ふことありシャルコー氏の説に依れば殊に後索の側部を侵すものとす其病機は神經結組織著しく肥厚増息し之れに由りて夥多の神經纖維は萎縮し以て其髓鞘を消失するに至る而して患部は肉眼を以て已に灰白色に變ずるを認むべし之れに觸るゝに強き抗抵ありて硬固なる巧手を以て作る所の機載製造品に染色する時は變性せる部は灰白質の如く濃厚に染色するを以て之れを明朗なる光線に輝すときは肉眼を以ても亦能く之れを認め得べし此損害は神經に沿うて大に延蔓す一二の症は併て側索を侵し又前角の神經節細胞の萎縮する者あり

症候

本症の経過を分つて三期とす

第一期 (又は前徵期とも稱す)に於ては通常脊髄後根の區域に於ける刺戟症狀殊に掣電狀痲瘋質斯様及び神經痛様の疼痛著明なり多數の患者に於ては歩行の際速に疲勞を覺ゆ此際已に知覺減少の徵を現は

すことあり即ち患者は暗室内に於て若しくは閉目して直立すれば身體動搖す亦歩行に於て一齊運動障害の初徵を呈することあり或る場合在りては已に此期中に腱反射の減弱或は消失を來たすことあり第二期に於ては知覺及び一齊運動の障害に基因する特異の症狀著明となる即ち暗室内に於て若しくは閉目すれば患者忽ち顛倒す同時に皮膚蟻走狀の感覺毛布を以て模摩するが如き感覺を呈す痛感往々減退し或は其傳導甚だ緩慢となり且つ帶狀感覺あり而して一齊運動の障害倍々著明となり歩行漸々困難に陥り腱反射機大抵減少し或は全く消失し又上肢に於ても徐々に知覺及び一齊運動の障害を發起す此期に於ては已に大小便の排泄を障害することあり亦男子に在りては生殖機能の刺戟性衰弱を起す

第三期に於ては知覺全く鈍癱し一齊運動の障害漸々著明となり膀胱及び直腸の筋衰弱し又往々痲痺し以て尿隨意的の排泄困難となり或は全く之れを爲すこと能はず後には通常膀胱加答兒を發し其續發

症を伴ふ男子に在りては陰萎を來たす者なり
後索及び灰白質に局限せる變性は多くは漸々側索及び前索に累及するを以て筋力減弱し且つ筋の萎縮を起す強直及び攣縮を發起するものなり

或る場合に於ては以上陳述せし症狀の外尙他の症候を呈することあり之れに屬するものは視力減弱及び黒内障にして時としては已に初起に於て發生す其他眼筋の痙攣(往々一時性なることあり)瞳孔縮小を來し稀には瞳孔散大して光線に反應すること不十分なり往々舌の痙攣、三叉神経の分佈内に於ける知覺鈍麻等を發起し精神機能は大抵著しき障害を呈せざると雖も重症に於ては記憶力或は概して精神作用減弱となり時には痙攣狂の症候を見ることあり
營養障害に就て殊に重要なるは褥瘡にして通常は末期に至りて發するものなり或る場合に於ては膝關節或は爾餘の關節に液質の蓄積するより腫脹を起すことあり(但し之れに疼痛他の尖症を伴はざるもの

なり)此症候は往々初起に發生し而して後に至れば多くは消失するものなり又稀れには初期に於て胃病發作を呈す即ち劇甚の胃痛に兼て嘔吐を起す其嘔吐は固より飲食に關せず數日若しくは數月の久しきに互ることなり

經過 常に緩慢にして多くは數年間持續す

豫後 極めて疑はし屢々治癒若しくは輕快する者を見ることありと雖も早晚其死亡の轉歸を取る者多し然れ共晩近の研究に依れば「ジフテリ」エンフルエンザ酒精中毒後に來たり者は豫後漸々良好なるを見ることあり

療法 本症に就ての醫療は現下殆ど在るを聞かず只姑息的對症療法にして多くは平流電氣を使用す
處置及び催眠暗示 該症の療法は左の順序に倣ふべし
患者甚だ衰弱せる時は第一、最初臥床の儘屈伸及び廻轉運動を命じ第二に其仰臥の姿勢に於て兩足を一定の地位に觸接することを命じ第

三、椅子或は踏段又は小なる梯子を與へ其降昇を練習せしむべし、但し患者の疲勞せざる前に暫時中止し休憩時間を與へ更に前記の運動を反復すべし、患者該運動に堪へるが爲めには強壯療法(滋養物を用ゆるの必要あり)の必要あり

歩行困難にして階段を昇降すること能はざる患者には第一に畫きたる線上脊髄炎療法を参照すべしを歩行せしめ而して一足は他足の前に置き跟骨部を順序的に持ち上ることを命じ第二に膝を屈げて歩行することを命じ第三に小弓形狀の歩行及び同後方歩行を命じ第四に姿勢を正しくして歩行することを命じ但し患者顛倒せざる様注意すべし第六、畫きたる螺旋線を走行することを命ず該走行は效甚だ多しと雖も患者往々困難を感ずることあり

走行機能を有する患者には常に適當なる運動を爲さしむるべし之れを爲すには走路一定すべし而して此走路中障害物を備へ置き之れを超えて歩行せしめ術者も亦此運動を患者と共に歩ふべし

注。該療法は次の場合に於て禁忌とす。諸關節の疾患、骨折、脊髓性腦膜炎等是れなり

其他知覺異常、生殖器障害、喉頭異常、咽頭異常の感聽官障害、營養障害、視官障害等には即ち對症暗示を用ふべし

第拾五章 末梢神經疾患

神經痛總論

神經痛は神經の疾患にして其主たる徵候は即ち疼痛なり其疼痛は一若しくは二三神經の走行に沿うて限局し稽留せずして弛張性若しくは間歇性を呈す時としては明に發作狀を呈す其解剖的變化は炎症或は充血又は腫痛なるやは未だ詳ならず此症に於ては全身症狀は殆ど缺如するが如し

知覺過敏は神經痛と全く異なるものなり

原因 神經性の稟賦は其素因と爲る而して小兒時に之れを發する

は稀れなり春氣發動期より五十歳迄の間に最も多しとす
蓋し生殖器機能發動時期中は大きな影響を爲すものなり而して婦人は坐骨神經痛を除くの外男子より多く凡そ貧血を合併する諸患殊に萎黄病、肺癆、神經衰弱等は皆該症の素因と爲る飲酒及び喫烟の過度も亦然り又之れを誘起するものは即ち感冒、傳染病殊に麻拉利亞、稀れには窒扶斯、微毒、水銀、銅、鉛等の中毒、生殖器の刺戟、其他腫瘤、動脈瘤、外傷骨膜炎等概ぬ神經幹を壓迫すべき疾患、下眼窩神經の其走行中に壓迫を受けて神經痛を起すが如くなり極めて稀れには一定部の過劇なる使役によりて之れを發すること有り(例之眼に於けるが如し)又本症は他症例之脊髓病にして其後根を刺戟する症候的里、依ト昆垓兒の一症候なることあり

症候

一 神經幹の走行に沿うて其末梢に至る卒然猛劇なる疼痛の發作(運動、壓迫、寒冷、精神感動等は往々之れを喚起す)を呈す而して其強弱の度は瞬間に變換し且つ他の近傍神經及び他側の同名神經に向て

此疼痛を放散す隨て知覺過敏となる又運動神經の刺戟症狀即ち震顫、痙攣を起し運動困難と爲り尋で脈管運動神經及び分泌神經の障害皮膚は蒼白を呈し且つ厥冷し或は紅色溫暖となり而して其部の腺分泌を増進すること往々是れ在り)を來すも且つて全身症狀を發すことなし神經の走行に沿うて數箇の所謂痛點なるものを存し其痛點は第一骨骸より發出する部第二神經走行の中部第三末梢にあり或は全く之れを缺如し或は之れを徵知せざること有り通例此發作は若干分時乃至數時間稽留するものなり其新發症に於ては屢々疼痛過敏陳舊症に於て知覺鈍麻(疼痛性知覺鈍麻)を呈することあり而して其兩症に輕癩癬を徵す又發作の際脈搏緩慢と爲り其他營養神經も亦障害を被り毛髮異常、發疹(即ち帶狀匍行疹、紅斑、痒癩疹等)皮膚及び筋肉の衰耗等を將來す稀れには皮膚の肥厚を發することあり
精神障害を起すは極めて稀れなり而して此病往再經久する者に在りては往々食慾缺如、情意鬱抑等を發起す

経過 多くは慢性にして大抵は治癒するも再發は最も屢々見る所なり

鑑別は陳述せし如くにて甚だ困難ならず

療法 平流電氣又は感傳電氣を稱用す其積極を神經上に消極を他部(不偏部)に置くべし其他冷罨法温罨法温浴海水或は山間に居住を轉ず手術は神經及び骨の切除法神經展伸法血管壓迫法なり

催眠暗示 疼痛消散を反復すべし然れ共疼痛劇甚なる時は施術甚だ困難にして時には催眠せざるに在り此場合は催眠の先立過程を設くるより寧ろ疼痛消散の先立過程を設け疼痛消散を主として醒覺暗示を反復すべし例之施術に着手前より必ず疼痛消散するなり今に輕快を覺ゆ既に輕快するなりと而して施術すべし尙施術しつゝ疼痛消散の暗示を繼續すべし斯くして患者輕快を覺ゆるに至らば既に醒覺暗示の奏效したるものと見做し此際直ちに催眠暗示を爲し即ち催眠せしめ然る後ち全く消散したるなりと暗示すべし疼痛劇甚なる時催眠爲さしめんと欲して往々失敗すること有るなり

三又神經痛

本症を發するは第一枝に多く第二枝に少なし殊に上眼窠神經より下眼窠神經に多し第三枝は最も罕れなり

原因 感冒外傷殊に麻拉利亞に由る者頗る多し動脈瘤頭蓋骨腫瘤骨膜炎等より來る者あり而して多くは成人に於て之れを見る肺癆にも亦多し

症候 概ね三又神經第一枝殊に上眼窠枝を襲ふ而して該部皮膚の輕麻或は咀嚼談話第二枝を侵さるゝときは然り等ありして疼痛發作を誘起し往々發作の前一種の前兆を呈することあり發作中には疼痛放散し顔面神經の痙攣を起し涙液津唾を流泄し顔面紅潮屢々嘔吐を發す其第一枝の侵さるゝ時は殊に上眼窠神經稀れには毛様神經或は鼻粘膜神經の疼痛を發す第二枝に於ては下眼窠神經痛を發するを最も多しとす稀れには額皮下神經痛若しくは胡蝶骨口蓋神經痛を起す

第三枝を侵さる、時は下齒槽神經痛、耳顛神經痛を發す其痛點は概ね骨より神經の發出する部に在り而して全三叉神經の疼痛を發するは稀れなり偶々是れ在るときは其原因は腦内に在る者とす然れ共細小なる神經枝別の障害の如きも未だ原因を末梢に歸すべからずして亦腦内に在ることあり

疼痛の延及は常に神經分佈に一致する者なり故に其分佈の狀を諒知するは鑑別に極めて緊要なりとす

療法

神經痛總論と同様なるを以て該條下を参照すべし但し便秘の症候を呈する者には通利の暗示をすべし

偏頭痛

一種發作狀に來る頭内の神經痛にして外部に分佈する三叉神經に關することなく(其所患は殊に硬腦に分佈する三叉神經枝になりと云ふ説ありと雖も亦他の頭内に分佈する神經枝にあるや未だ詳かならず)且つ他の疾患に於ける症候的頭痛或は微毒性頭痛と區別すべきなり

原因

大抵神經性の人に之れを發す而して婦人殊に歇私的里に多し男子にして其素因を存する者は學生に多しとす通常二十歳より五十歳の間に來る生殖器機能障害より來ることあり而して發作の誘因は飲食の誤用、精神の感動、身體の勞働等なり

症候

該頭痛は固より偏側殊に多くは左側を侵すものにして大抵朝起の際に倦怠、懊惱、食氣不進、耳鳴、眼花等の前兆あり次で前頭髮の前及び中部に區域する疼痛を發し隨て四方に放散す極めて稀れには兩側に來ることあり而して其疼痛は之れを壓するに由りて或は増進し或は輕快す常に光線及び音響に對する感覺過敏と爲り時には血行障害を見る即ち頭部血管に痙攣の狀況、神經緊張性偏頭痛を呈し或は痙攣の狀況(交感神經痙攣性偏頭痛)を發するに由りて其症狀自から異なりて患部の皮膚は蒼白色にして厥冷し或は赤色にして灼熱す而して涙液の分泌多くは増加し屢々乾嘔若しくは嘔吐を發し一時其疼痛の緩快することあり疼痛の持続は六時乃至十二時間若しくは其以上に

して睡眠を催す時は諸症忽ち消散することあり此の如く疼痛發作は數日若しくは數週間に反復して來るものなり該發作間歇時は大抵患者全く爽快にして疼痛を覺えず

注意 腦諸病又は腎臟病或は婦人にして子宮疾患其他感冒、微毒等に在りても起るものなれば上章の原因及び症候を確むるべし

療法 神經痛總論を参照すべし

頸後頭神經痛

本病は(第二)大後頭神經痛點は乳嘴突起と上頸椎との間に在りに最も多し(第二)小後頭神經痛は耳部より後頭部に限局す(第三)大耳神經痛は耳及び其周圍に區畫す(第四)下頸皮下神經痛は頸部と下頸部とに在り(第五)鎖骨上神經痛は頸の下部と鎖骨部に局在す

此等の諸枝同一に侵さるゝときは固より其疼痛の境界極めて廣汎なり而して上章に記せし痛點の外猶ほ棘狀突起、後頭結節、乳嘴突起、耳翼に存することあり其疼痛は著しく放散す上肢に放散することあり頸

筋の緊張及び痙攣を兼發し稀れには嘔吐を起すことあり

原因 感冒、脊椎諸病稀れには其中樞に緣由することあり

療法 上章に倣ふべし

膊叢神經痛

症候 本病は第五より第八頸神經及び第一胸神經の疼痛にして此叢の神經悉く障害され或は唯其數枝之れに罹るものあり而して疼痛は頗る猛劇にして(殊に夜間)且つ放散す又知覺異常、上肢の強直及び運動困難屢々患部厥冷して蒼白色を呈し或は皮疹を發す痛點は膊叢の他は極めて不定なり

注意 本病の鑑識は往々困難なることあり

原因 外傷、腫瘤(動脈瘤、癌等)膊叢を壓迫する症、感冒、過勞、歇私的里等

より發起する者なり

療法 前章に倣ふべし

横隔膜神經痛

横隔膜神經痛は乃ち頸神經より起り其疼痛は横隔膜附着部に局在す次で胸廓に沿うて深部に於て上方に延及す痛點は前斜角筋頸椎及び第三肋軟骨にあり

肋間神經痛

是れ胸神經殊に肋間に走行する所の神經痛にして屢々婦人に見る左側殊に第五乃至第八胸神經に多しとす

原因 感冒脊椎疾患、脊髓諸病殊に脊髓勞歇私的里等より來る然れ共其原因不明なることあり又肋膜炎後に厚皮を生ずる者に發することあり

症候 疼痛は偏在して大抵前及び側部に甚だし且つ諸運動呼吸咳嗽等に由りて増進す痛點は第一後部第二側部第三前部に存す而して知覺過敏帶狀匍行疹を併發す

經過 急性或は慢性なることあり就中慢性多しとす

豫後 感冒等に因する者は佳良なりと雖も其餘は後來の醫療に於

し疑ふものとす

療法 前章に倣ふべし

乳房神經痛

是れ貧血性の妊婦或は歇私的里の授乳婦に發する乳房の神經痛にして往々是れ疼痛性の小腫瘤(神經瘤なるか)を併發するなり

療法 前章に同一なり

腰叢神經痛

本病は甚だ稀有に屬す(第一腸腰神經痛腸骨鼠蹊神經腰鼠蹊神經精系神經は臀部陰阜陰囊(大陰唇)に發す而して痛點は脊椎及び該神經の走行中に存す(第二脚神經痛)多くは股神經罕れには側股皮下神經は上腿の前及び内側に發し膝蓋部に於ては前部に沿ひ下腿部に於ては内側に沿うて足内縁に波及す痛點あり屢々強劇に放散す而して運動障害甚だしく稀れには脈管運動神經及び分泌神經の障害を起す(第三鎖閉神經痛は上腿の内側に在り然れ共是れ頗る稀有なりとす

療法 上章に倣ふべし

坐骨神經痛

是れ坐骨神經叢及び之れより發出する所の神經の疼痛にして該症に罹る者頗る多しとす

原因 感冒過勞より來る然れ共感冒の他にも亦殊異なる素因あり是れ婦人に少なきを以て知ることを得而して成人に屢々之れを見るも亦理會に苦む過勞に於けるも亦然り何となれば車夫其他勞働者には此疾の稀れなることを以てなり大抵脊髓病及び脊椎諸患若しくは骨盤内の腫瘤或は分娩の際兒頭の壓迫其他血行障害又は熱性病或は劇寒に久しく堪へし者等に基因す而して本症は男子に多く概ね壯年に在り

症候 疼痛は大抵徐々に發し漸く増進するものにして最も皮内に於て甚だし而して多くは弛張性にして殊に日晡或は夜間に發作す又運動に由りて此發作を將來することあり疼痛は上腿膝部の後面其他

腓腸部下腿の外前部足蹠等に延及す又諸部同時に之れを發起することあり痛點は骨盤より神經の發出する所臀筋下緣膝膈腓骨小頭足蹠足背等に在す而して疼痛放散し運動著しく障礙せられ動もすれば蹠跛を致す而して痙攣を併發するは稀有なりとす

豫後 關係的に良なり

療法 新發生に於ては患肢を安靜に保持し局處に水蛭若しくは發泡膏を貼す場合有りと雖も概して神經痛篇を參照し其治則に倣ふべし

第拾六章 痙攣

顔面神經痙攣

原因 感冒腦前中央迂曲の腫瘤爾他延髓等に於ける一種の刺戟に由る又神經痛に續發することあり或は神經性の者に來り亦或る動作は其發生に感動を有す往々遺傳性なることあり

症候

時として唯一二の部分のみを侵さるゝことあり(眼及び口)時としては全神経に及ぼし顔面神経の主宰する諸筋著しく不正の運動を爲し忽ちにして全く鎮靜す其強直性痙攣を發するは稀れなり

注意 本症を他側の痙痺と錯誤すること往々是れあり

經過

極めて緩慢なり

豫後

從來醫療に於ては不良爲る者とす

療法

電氣を施すも其效確實ならず又神經切除法の如きも之れを行はざるを可とす

催眠暗示 耳後より患部を徐ろに摩擦し痙攣制止或は鎮靜又は輕快等其病狀即ち輕重に由りて適宜なる暗示すべし而して精神常に安靜にして且つ勞せざる様能く注意爲し置くべし

職業的の神經障害 書痙

本症は手を多く使用する人即ち書記、縫匠、靴工等に發する所の病況なり此症は職業に於ける一齊運動の障害にして手指の一定の使用に於

て痙攣を起す他の運動には障礙なし而して其病根は乃ち中樞に存す

る者なり例之筆を執るに臨みて忽ち痙攣或は緊張を發するを謂ふ此病に痙痺を兼ね且つ前膊に倦怠を覺ゆることなり

經過

大概緩慢なり

豫後

藥劑其他電氣療法を以てするも幾ど不良に屬す

療法

稀れには久しく其職業を止むる時は治療することあり而して稍々其效を見るものは平流電氣にして消極を脊椎に積極を患手に置くべし斯くて其手を久しく安靜ならしむを緊要と爲す又輓近の研究に由りて運動療法(一定の微細なる運動練習)も一部効果を奏す其他海水浴、按摩法を施すことあり或る時は麻醉膏を貼用すると雖も其效少なし

催眠暗示 痙攣全く癒せり依て書記すべし斯くて催眠中書記又は微細なる運動を練習爲さしむるべし餘の實驗に由れば多くは催眠暗示の成功し此間書記を試験するに佳良なり而して醒覺後も尙斯くの如

く差支無し右の暗示を強く反復するを以て良とす

テタニー

本症は一時の發作狀に來る所の強直性痙攣なり即ち手、手指、足、足趾稀れには上膊及び下脚等に發す而して手指著しく拇指に向て強直狀の屈曲を爲す手は彎曲し前膊は内收し足趾屈曲して恰も馬蹄を爲す概ね四肢に一時の倦怠、知覺異常を呈するの後ち初め痙攣次で強直を來し兼て劇痛あり極めて罕れには全身の諸筋緊張して終に危篤に陥ることあり(横隔膜及び聲門の痙攣に由る)而して該部の神經或は血管の大幹を壓するに由りて亦發作を喚起す本症は中樞及び周圍に根帶する者なり

原因

主として小兒に發す妊婦産婦は之れに次ぐ亦多數性關節炎稀れには重症の傳染病及び血液變調に於ても之れを來す又反射的に腸蟲刺戟に於て發することあり尙感冒にも基因する者あるべし該痙攣は大抵冬期に於て發起す又本症狀を故らに模擬するに因て發起す

ることあり又學校に於て流行性と爲りて起るより見るも處女に多し

豫後

良なり

療法

先づ之れが病原を療し而して電氣體操療法(即ち運動療法)を行ふものとす

催眠暗示 大抵間歇時に於て爲すべし而して最早治癒せり爾後決して痙攣の起きざるものなり全く癒せり若し痙攣發作ありなば至つて輕度にして殆ど意とせざる程度に於て在るなり余の實驗に依れば本症は大抵二三回若しくは五六回の催眠暗示にて癒すなり

アテトーゼ

本症は未だ確定せざると雖も腦恐くは皮質の障害に因するなり而して手稀れには足若しくは爾餘の體部を侵す通常偏側性なり即ち手に於ては手指の強劇なる屈曲、展伸、内收、外收交々起り且つ手腕の關節廻施及び廻前廻後の運動を爲す是れ極めて舞蹈病に近似する者なり而して大抵發作狀に來り總て精神の興奮は忽ち之れを喚起することあり

り而して筋は感傳電氣に強く反應す

療法 多くは平流電氣を應用し以て治す

催眠暗示 即ち對病的にすべし

第拾七章 癱瘓

顔面神經癱瘓

原因 中樞性は、レンズ核出血前中央迂曲の障害其他腦脚及び顔面神經核の損害、延髓球癱瘓、狂人進行性癱瘓、微毒等に因り周圍性は腦底の腫瘤、骨傷、骨膜炎、大抵他の腦神經障害を合併す、神經徑路中に於ける障害(中耳の骨炎、腐骨疽)或は頸部の障害乃ち淋巴腺腫、耳下腺炎或は分娩時の外傷に基因し或は感冒に於ける全く末梢性なることあり

症候 原因の中樞性と周圍性とに由りて自ら差異あり而して中樞の癱瘓に於ては大抵口圍及び鼻部のみに限局し周圍性に在りては全神經に延及す而して周圍性癱瘓の輕症に於ては電氣反應に異常なし

と雖其重症に在りては變性反應を呈し感傳電氣反應及び一切の反射機共に消滅し筋瘦削等を致す、中樞性に於ては電氣反應異常なく筋瘦削、缺如し近傍の器官に障害あり又周圍性に於ては顔面神經の徑路に近接せる器官の疾患を徵知すること、在り全顔面神經癱瘓の確徵は患側の口角下垂し爲めに吹嘘すること、能はず又口笛及び唇音を發する能はず口を閉て頬頰を噓張する能はず閉目する能はず額部に皺襞を作る能はず鼻唇溝消失す而して莖狀乳頭孔より下部の所患なる時は以上の諸症候に止まるも其上部に至るに從て唾液分泌及び味覺舌の前部の障害、聽覺過敏等を起し若し味覺障害なくして爾他の諸症候を顯すものは其所患膝狀神經節の上部にあるものとす又患側の攣縮、纖維性搖蕩若しくは共同運動を起すことあり

兩側の癱瘓に於ては其顔貌を變ずることなし是れ兩側の緊張に差等なきを以てなり若し患者談笑啼泣せんとする時には顔面毫も運動することなく恰も假面の如し末梢性兩側顔面神經癱瘓は兩側岩狀骨の

腐骨疽に於て之れを見る(多くは耳聾を兼る)中樞性兩側癱瘓は例之延髓球癱瘓に於て見ることあり

豫後 輕易なる癱瘓質斯性及び偏癱症に於ては佳良なり重症の癱瘓質斯に因する周圍性に於けるも亦然り岩狀骨の腐骨疽に由る者は甚だ疑はしきものとす

療法 兩乳嘴突起を摩擦し或は壓迫し輕打し而して以て物理的刺戟を與ふべし(電氣は平流電氣を通じ且つ癱瘓部には感傳電氣を用ゆるべし)

催眠暗示 癱瘓消散從て顔貌舊に復すなり現に恢復しつゝ、在るなり該觀念を強硬にすべし夫れ既に輕快せり全く癒するに至ると右の暗示を反復すべし余の實驗に由れば周圍性に於ける者は三四回若しくは六七回の施術によりて癒せり就中發症期の者に在りては一回の施術によりて全癒せしものあり然れ共未治不良の者亦無しとせず

三叉神經運動癱瘓

本症は極めて稀有に屬すものなり偶々是れ有る時は多くは腦底の腫瘤の一症候に過ぎず

舌下神經癱瘓

多くは中樞の原因にして唯其一症候なり例之延髓球癱瘓狂人性癱瘓偏癱に於て見るが如し

鋸筋癱瘓

此病は長胸廓神經の分佈する前大鋸筋の侵襲せらるゝ者にして其狀たるや肩胛骨は舉上せらる其上角は外方に傾き下角は内方に傾き而して全内縁は翼狀を呈し手は地平線を超えて高舉する能はず

原因 外傷若しくは腫瘤の壓迫に由る亦常に肩胛上重荷を負擔する者に發す

療法 以上三種の疾患は上章(顔面神經癱瘓の治則)に倣ふべし
催眠暗示も亦然り

知覺鈍癱 知覺異常 疼痛缺亡

腐骨疽に於て之れを見る(多くは耳聾を兼る)中樞性兩側痲痺は例之延髓球痲痺に於て見ることに在り

豫後 輕易なる痲質斯性及び偏癱症に於ては佳良なり重症の痲質斯に因する周圍性に於けるも亦然り岩狀骨の腐骨疽に由る者は甚だ疑はしきものとす

療法 兩乳嘴突起を摩撫し或は壓迫し輕打し而して以て物理的刺戟を與ふべし(電氣は平流電氣を通じ且つ痲痺部には感傳電氣を用ゆるべし)

催眠暗示 痲痺消散從て顔貌舊に復すなり現に恢復しつゝ、在るなり該觀念を強硬にすべし夫れ既に輕快せり全く癒するに至ると右の暗示を反復すべし余の實驗に由れば周圍性に於ける者は三四回若しくは六七回の施術によりて癒せり就中發症期の者に在りては一回の施術によりて全癒せしものあり然れ共未治不良の者亦無しとせず

三叉神經運動痲痺

本症は極めて稀有に屬すものなり偶々是れ有る時は多くは腦底の腫瘤の一症候に過ぎず

舌下神經痲痺

多くは中樞の原因にして唯其一症候なり例之延髓球痲痺在人性痲痺偏癱に於て見るが如し

鋸筋痲痺

此病は長胸廓神經の分佈する前大鋸筋の侵襲せらるゝ者にして其狀たるや肩胛骨は舉上せらる其上角は外方に傾き下角は内方に傾き而して全内縁は翼狀を呈し手は地平線を超えて高舉する能はず

原因 外傷若しくは腫瘤の壓迫に由る亦常に肩胛上重荷を負擔する者に發す

療法 以上三種の疾患は上章(顔面神經痲痺の治則)に倣ふべし催眠暗示も亦然り

知覺鈍痲 知覺異常 疼痛缺亡

本症は即ち他の疾患の一症候に過ず大抵中樞の疾患殊に脊髄炎に起因すると雖も屢々傳導缺損稀れには周圍性神經末梢諸器の疾患に由来するもの有り而して知覺鈍癱部に局部と汎部の別あり汎部の鈍癱は稀にして其患者は唯日中に於て走行することを得而して虚空中に浮遊するが如きの感覺を生ず日本人に多く生ずる所は下肢の知覺鈍癱にして是れ脚氣症及び癩病の多きに因る者なり又自ら知覺鈍癱と稱する一症にして細に之れを検する時は則ち知覺異常なること有り是れ其感覺の錯誤にして之れに抵觸するに猶能く知覺を存す又知覺鈍癱の軽度なる者あり之れを知覺減少と稱するも亦可なり筋知覺鈍癱、内臟知覺鈍癱、疼痛缺亡、疼痛性知覺鈍癱等あり知覺鈍癱部は往々厥冷し青色を呈す汎部の知覺鈍癱にして中樞性なる時は其所患恐らく内囊に占居する者ならん周圍性知覺鈍癱に於ては反射機消滅し脊髄の中樞性知覺鈍癱に在りては反射運動弓は患部より上半或は患部に存する時は反射運動缺如す腦中樞の知覺鈍癱に於ては反射機に異常

なきか或は増進するものなり

原因 癩麻質斯性、外傷、貧血性、中毒性、傳染病性例之窒扶斯、歇私的里性癩病性、脚氣性、脊髄癆性の知覺鈍癱(兼て知覺異常等なり)脈管運動神經及び營養神經障害(眼目傷害等に因ることあり)

療法 電氣のみ有効にして他の諸藥は著しき感應なし最も感傳電氣を佳とす又温浴も良とす
催眠暗示 知覺通常に復せり是れにて十分なり本症の如きは蓋し催眠暗示は唯一の療法と謂ふを得べし

第拾八章 舞蹈病

原因 婦人殊に神經性血族の蒼白なる處女の春機發動期は其基因を有すること大なるものなり本症は七歳乃至十四歳の間に最も多し往々妊婦の前半期は此病の發起に感動を及ぼすことあり又心臟内膜炎及び多數性關節炎にも亦關涉する所在り劇甚なる恐愕は本症の誘

因となることあり其他是れを模擬するに由りて精神上の傳染を致すことあり而して該疾患は腦皮質運動區域に在りとす

症候

本症は全く次序なき衝突狀の運動を爲すものにして殊に四肢及び顔面に於てす其運動狀態は通常の運動と痙攣の中間に位し患者自ら意志を以て之れを制止する能はず蓋し無爲運動の甚しく連續する者にして千狀萬態なる動作を爲し恰も遊戯するが如く之れを傍觀する時は實に抱腹に堪へず若し患者人在りて我が運動に注目せらるゝことを知る時は即ち益々劇甚と爲る往々患者隨意の運動を營まんと欲する時は反て劇甚となることあり而して睡眠又は催眠中に在りて多く歇止するものとす其初めは大抵前搏に起り手指及び手の運動を爲し次で漸く全搏顔面下肢罕れには軀幹に及ぼす飲食談話書寫歩行等は固より之れを營爲すること能はず又屢々嚔下困難と爲る往々脊椎に痛點を認むることあり

余嘗て福島縣に於て重症なる一患者を療せしこと在り患者は十三歳

なる男子なりしが余の往診したる際は麻繩を以て柱に縛し在りたり家人に就て其理由を質せしに家人曰く三日前のことに在りしが患者卒然火の燃え在る爐の中へ蹈り入り大なる火傷爲せり斯る場合に於ても患者自ら此危険を避ること能はず唯苦痛を訴へ啼叫し居るのみと

豫後

大抵善良なるに在り

療法

電氣水治法體操術等なり其他藥劑療法は種々在りと雖も多くは著しからず

催眠暗示 不隨意運動は全く禁止せり若し萬一發作したる時は隨意に之れを停止することを得るなり

大舞踏病

患者踊躍し或は攀躋するの狀あり或は一身跳舞飛揚すること在り該症は大抵歇私的里性にして時としては地方病に爲ることあり

療法

前章に倣ふべし

癲 癇

本症は卒然發作する劇甚の強直性尋で搖擗性の痙攣を發し人事不省と爲る斯くて神經中樞に解剖的變化を發見する能はざるものなり一時は血管の收縮に由りて「ワロルス橋」及び延髓の貧血を起し之れが爲に筋痙攣を起すの説ありしと雖も軌近動物試験に由りて腦皮質の障害なることを證明するに至れり(癲癇發作中に於て無意識となるは其一證なりとす且つ腦皮質の器質的疾患に在りて疾候的癲癇發作を來すも亦然り)而して頻回の發作に由りて斃れたる屍體剖檢して無数の肺出血及び肺氣腫を發見すること往々是れあり

原因 遺傳性なること在り(一は直ちに癲癇よりし一は神経系疾患の素質よりす)或は癩痕、胃病、絛蟲等より反射性となりて來ることあり其他鉛毒、頭蓋骨構造異常より發す或は腦腫瘤等に由りて此病に類する症(癲癇様發作)を來すことあり驚愕も亦一の原因を爲すことあり而して強劇の精神興奮には身體勞働、交接、手淫等は之れが誘因と爲る本

病は概ね壯年に發するものにして男女の差は殆ど同等なりとす

症候 各發作は往々一種の前兆(運動性、知覺性、精神性、内臟性等あり)を呈し之れに先ち甚だしく叫呻(每常ならず)して人事不省と爲り昏倒す而して其昏倒するや固より其個所を撰ばざるに由りて動もすれば身體の諸部を損傷し或は火傷することあり(故に前驅症を發するの際は一肢を縛して之れを防ぐことを得る時は患者大に益あり)次で全身の強直性痙攣を發し口を密閉し瞳孔散大して光線に反應せず(是れ本病の眞偽を判別する上に於て緊要なり)而して直視、血膜充血及び顔面浮腫を帶ぶるが如く青色を呈す次で顔面、眼、頸、軀幹、四肢の諸筋、呼吸筋、舌筋等に搖擗性痙攣を起し口内より血液を滑ゆる泡沫を噴出す是れ自ら舌を咬傷するに由る手の拇指は内屈し脈搏亢進皮膚濕潤し大小便の失禁を見る但し往々反射機を有ることあり發作は大抵一分時乃至十分時持續す(稀れには之れより長時間に亙ることあり)諸症漸く退散するに當りて多くは欠伸し深大の呼吸を爲し稀れには嘔吐し或は

大便を泄し倦怠甚しく酣睡して後初めて醒覺し絶えて微恙を留めざることあり時としては頭痛を發起す而して發作時の事實を追憶すること能はず又發作後排泄する小便中に少量の蛋白を含むを見ると謂ふ然れ共是れ非なるにあり

小發作に在りては卒倒若しくは痙攣を缺如し唯癲癇性の眩暈を起すのみ癲癇性精神病なる者あり此症は癲癇發作に代ゆるに卒然發する所の奔走狂嗜殺狂を以てす是れ頗る恐る可き一症と爲す殊に夜間癲癇に於て然り

發作數は極めて差異在り或は日々一次或は數次或は毎年數回連續することあり

經過 極めて慢性にして往々數十年間持續せることあり斯の如き症は漸く精神障害を起し(每常ならず)記憶力衰退し(甚だしきは全く健忘症に陥る)失語、痴呆及び痲痺等を將來す然れ共又自ら治癒する者も少しとせず

注意 本症を癲癇様發作と診別するを緊要とす乙症に於ては他の腦疾患の症候在りて間歇時にも亦其症候の持續す又歇私的性癲癇なるものあり歇私的里の條下を参照すべし

療法 母癲癇を患ふる者は其兒に哺乳せしむべからず癲癇の癩痕腫瘤等より前兆を發起する時は須らく是れを截除すべし又精神の保養健康に適するの空氣適當の運動及び食餌等に注意すべし
催眠暗示 爾後發作せざることを斷言すべし而して貧血には血量増加亦充血には血液下行其他の症候には即ち對症暗示を適宜に用ゆべし

本症の經過は頗る緩慢なるを以て醒覺後に於て下の暗示を忘る、べからず若し發作在りとするも其時間に於て又回數に於て確に輕快を自覺することを得るなり而して治療は數日若しくは數月或は數年間を要すものなりとす

第拾九章 神經衰弱

原因 本症は未だ研究不明に屬するものなり而して之れが主因は精神過勞、外傷、微毒慢性胃腸加答兒、酒精中毒、房事過度、手淫、熱性症例之空扶斯麻拉、里亞實扶的里等に依りて神經の障害を來せし者又脚氣回復期に於て往々之れを見る而して神經性の稟賦も亦此基因となる

症候 本症は徐々に發するを常とす其多數は男子にして婦人には少なし殊に日本學生に多く見る所なり而して大抵春機發動期より三十歳迄の者に多しとす
頭痛、壓重、心悸、亢進、眼花、耳鳴、倦怠、不眠、神經過敏、嗜眠、遺精、早漏、陰萎、胃痛、便秘、神經痛、憂鬱、興奮、記憶力減退、驚愕、注意散漫、注意集中理解、判斷力等の衰退

漸々慢性にして高度に至る時即ち高度なる神經衰弱は幻覺及び錯覺、小細妄想、強迫觀念、知覺異常等を呈す

而して初起には身體何となく不安を覺え其何症たることを察知せず唯自體は重症に罹りしものと過慮し終に沈迷し全く健康に復するの望を絶す故に患者憂慮して止す濫りに諸藥を服用し屢々醫を轉じ種種の療法を試み而して病症の輕重及び豫後を質問す稀れには醫書を涉獵し或は其病の癒せざることを確信する者あり然れ共憂慮は尙ほ止まざるものなり而して一旦治癒すると雖も稍もすれば復た精神沈鬱に陥るを常とす

經過 極めて緩慢なり

豫後 生死に關しては佳良なり多くは職務を營み得るものなり然れ共患者は常に其心緒快々たらざるに因て稍もすれば一家の和熟せざることあり

療法 微毒、胃腸加答兒等より發起したる者は直ちに原因療法を爲すべし然る時は往々良效を奏すること在り其他冷水療法又は山間若しくは海濱に轉居せしめ騎馬、體操等即ち運動療法も亦效なしとせず

然れ共本症は精神療法を以て唯一なるものとす是れ恐らく何人も異議なき所なり

催眠暗示。一體本症を患ふる者は概ね疑惑心強し故に第一に疑惑心を除去し然る後に於て爲さざれば患者の所謂自發暗示に依りて即ち暗示とならざることあり假に其場合に於て暗示と爲ると雖も醒覺後に於て自發暗示を以て催眠暗示を打破すること往々是れ在り故に施術前即ち醒覺暗示に最も注意すべし該暗示に先つて第一患者の知識境遇品性習慣性格等を豫知し然る後に於て患者の訴ふる所と其者の知識の程度に依りて或者は一々論理的に説明し或る者には其訴ふる所多くは虚戲と認むるも之れに同情を寄せ所謂誘念法を應用し以て患者の信用を博すことに務むべし斯くする時は施術も亦頗る容易なるに至れり

催眠暗示は對症的に爲すを可とす而して慢性にして數十回の施術を要すべき患者に際したる時は必ず左の順序を誤る勿れ即ち初回に爲せし暗示と矛盾せざること是れなり多くの患者を扱ふ者は稍もすれば之れを忘却し對症暗示中前後撞着せることを謂ひ之れが爲めに患者の不信用を招き遂に成效せざるのみならず反て排斥を受ること、爲るに至る

歇私的里

義解 本症は神經中樞の疾患なりと雖も未だ解剖的變化を明證すること能はざるものなり而して其官能障害の最も多きは他病の比にあらず主としては知覺機の發症又は運動機及び脈管運動神經殊に精神症狀は屢々強劇なることあり概して沈抑症狀に比すれば刺戟症狀の甚だしきものとす

原因 男子には罕れにして婦人には頗る多し或る親屬に於ては遺傳性なる者にして此症よりし或は總て神經系病よりすることあり故意に其病狀を模擬するも亦之れを發生するに感動を及ぼすものとす故に往々處女の其母より之れを傳習することあり而して其誘因は生

殖器の疾患就中慢性子宮炎、子宮腔部の糜爛、子宮轉位及び屈曲、月經困難、閉止等是れなり稀れには卵巢諸症、流産、産後等より將來することあり殊に貧血、萎黃病、虛弱なる體質に多しとす生殖器に關する感情愛兒の夭折或は配偶の不遇の如きも亦本症の誘因と爲る時としては急遽なる精神興奮の之れが原因に大なる關係を有することあり而して此病は春氣發動期前に發するは稀れにして大抵十五歳より二十五歳の間に於て之れを發す然れ共後年(月經閉止期)に發することあり

症候

本症は徐々に發するを常とす然れ共多くは數多の症狀同時に蜂起するを見るなり

知覺機障害。遊走痛、局部の頭痛、偏頭痛、胃痛、神經痛、神經性心悸亢進、五官聽、視、嗅、味、知覺等の過敏と爲るを奇貨として之れを用ひて詐術を行ふことあり及び内臟神經の過敏症、脊髓及び肚腹の知覺過敏若しくは卵巢知覺過敏、關節神經痛を發す知覺鈍麻は屢々其位置を變換すと雖も往々持久の偏身知覺鈍麻を見る又偏眼の色盲を發す嗅味二覺の特

異性を來し例之莖葉を惡臭とし阿魏を薰香と爲し或は木片及び壁土其他通常人の嫌厭すべき物品を食せんと欲する等の如し又歇私的里性の心下搏動若しくは苦悶を徵することあり

運動機障害。聲門痙攣、嘔吐、噴嚏、呼吸痙攣、咳嗽、吃逆、嚥下困難、尿閉、陰腔痙攣、嗤笑及び啼泣、痙攣、搐搦、縮等を起し加之汎發性痙攣所謂歇私的里性發作を來す而して大抵は前兆あり且つ其痙攣は癲癇發作に比すれば多少寛かにして殆ど運動狀に類似す屢々一異の正規的なるあり神識は概ね未だ全く消亡せざる者とす患者は其觸る、所忽ち咬嚼し或は打撃す而して精神感動に由りて發作を喚起することを得るべし痙癆。は多く四肢に發するものにして腦神經に來るは極めて稀れなりとす然れ共眼瞼下垂及び喉頭痙癆を起す者あり雖も此例に非ず横隔膜の痙癆を起すも亦極めて稀れなり而して脊髓諸患と區別すべき所は歇私的里に在りては痙癆其部を轉換すること著しく且つ速なりされど時としては一部の痙癆を持久することあり

患者常に平臥して往々筋萎縮を起し腸管及び腹壁の痙攣に由りて鼓脹を發し俄然として膨滿す(腹内風氣)而して腹部を輕撫し若しくは按摩するか或は暖氣或は放屁の後も忽ち消散す
精神的症狀 情意一變して忽ち涕泣し忽ち嗤笑す但し思考力は尋常なりとす然れ共往々精神を勞するを厭ひ且つ百事懶惰と爲る而して高度に至らば幻覺を發し殆ど精神病と同一の現象を呈す然れ共歇私的里に在りては意識統一を缺ぐが如きは全々無きものとす凡そ歇私的里患者の庶事に於て爲し能はざると稱すは然るに非ず唯爲さいるものなり
分泌器の障害 涙唾尿汗等の分泌増多し極めて稀れには腔内より多量の分泌を泄すことあり又尿閉を起し尿素を吐することあり其他常に脈管神經の障害を起す而して患者自ら出血在るを訴ふると雖も多くは詐僞に屬す歇私的里性熱も亦然り時には歇私的里性便秘及び代贖月經等あり

注意 詐病及び神經中樞に解剖的變化ある諸患殊に癲癇及び歇私的里性癲癇と識別するを要す

經過 本症は數月或は數年間持續し時に或は危重汎發的症狀を發し或は輕微刺戟症狀を起し又は局處痙攣を來すことあり概して持久の痙攣或は精神上に甚だしき障害ある重症は少なしとす

豫後 良なり是れ直ちに生命に關すること稀れなればなり然れ共其全癒は疑はしく多くは月經絶止期に至れば自ら治癒すること多きなり

療法 素因を有する婦人及び處女には豫防法を行ふべし則ち身體を運動せしめ之れを健康の境域に導くべし精神療法は最も肝要なるものにして醫師は必ず其患者の信任を得るを待ちて之れが治を施すを要す
轉地療法、溫泉療法も效あり其他金屬療法、電氣療法、水治療法も亦有效す

凡そ歇私的里は自發暗示に由りて數多症狀を呈すこと往々是れあり例之頭痛は爲さるるやを想像する時は屢々之れが事實に現れ即ち頭痛と爲り又は腕は痛まざるやと思へば直ちに痛み初めるが如き是れなり而して暗示感性の強劇なる者は先づ歇私的里を以て標型とす故に該患者に對しては術者最も慎重なる態度を執り且つ患者の訴ふる所一々承認せざるべからず斯く爲さるる時に於ては又施術も時として困難を見るに至る而して或る患者にありては短時日に癒すと告げて反て失敗を招くこと往々總て重患の如く説けば反て満足の意を表する者往々在りとす

催眠暗示は前章を参照し以て對症暗示を適宜に爲すを良とす

第貳拾章 呼吸器病

喘息

本症は從來種々の名稱あり今其二三を擧ぐれば左の如し

氣管枝痙攣本然喘息普通喘息神經性喘息是れなり

原因 氣管枝喘息は粘膜の急性腫脹に基因爲すとの説ありと雖も最も事實に近きは細氣管枝の筋痙攣に由りて起ると爲すものなり然れ共此筋痙攣を起すの原因は未だ確説を得ずされど多數の場合に於ては反射的に發生するは事實なるべしライテン氏は自己の發見に由る結晶喘息結晶に因する粘膜の刺戟に依りて痙攣を起すとの説を爲せり然れ共時には喘息様發作を呈せる肺氣腫患者の痰中に此結晶を發見することあり又左の事實在り

慢性鼻加答兒鼻息肉鼻甲介の腫大等より反射的に發生し而して該疾患治癒する時は發作も亦消失す又或る喘息患者は一定の臭氣例之或る果物花等の臭氣に由りて直ちに發作を起すことあり其他扁桃腺の肥大胃腸及び女子生殖器の疾患尿毒症より喘息發作を誘起するを見る而して神經性喘息は單純なる神經性の氣管枝痙攣にして總て慢性の者には此種に因する者多し

本症は多く二十歳より四十歳の間に發し殊に男子に多く時としては遺傳性を證明することあるべし

症候

喘息發作は稀れに倦怠全身の違和咽頭及び心下の異常感覺等の前兆を呈する後ち若しくは卒然夜間に於て發起す而して其發作の狀況は即ち患者恐怖の狀を現はし皮膚蒼青色を呈し往々汗冷を發す呼吸は困難にして兩息殊に呼吸延長し且つ笛聲を帯び諸呼吸補助筋を使用し頭を後方に傾け兩手を支張す呼吸の數は通常なるか或は少しく減退すと雖も稀れには稍々頻數と爲ることあり

打診するに肺に空盈音紙を以て製せし盆を打つに均しき音を發し横隔膜低下し心觸音部狹小す

聽診するに笛聲若しくは囉音的騒鳴ありて氣胞音不明と爲る發作中は甚だしく咳嗽を發し稠厚性粘液を咯出し其中には饒多のシアルコ氏結晶、暗息結晶を含有す脈搏多くは頻數と爲るも體温は亢進せず一發作の持續は數時間より一週間にして其遷延せる場合に在りては發作

の強弱一定の度に留まらずして緩快と増劇と相交換して來たる者なり發作の數には甚だしき不同あり則ち時として殆ど毎夜之れを發することあり時としては數月數年の間歇を以て來ることなり

豫後

良なり而して其發作の狀態は最も險惡なるが如きも之れが爲めに直ちに生命に關すること殆どなし但し根治は稀れとす

本然喘息は須らく肺氣腫、毛細氣管枝炎等に由りて起る發作と診別すべし則ち此病に在りては發作の間歇時に於て毫も肺部に徵知すべき器質的變化を見ざるものとす然れ共喘息の持久する時は屢々肺氣腫を誘起することあるを以て同時に兩症を目撃し孰れの症が原因なるや之れを區別するに困難なること往々是れ在りとす

療法

本症に對して注意すべきは鼻、咽頭等の疾患無きやを糺し且つ検査し茲に其疾患(鼻息肉、扁桃腺肥大等)を發見する時は其治を醫師に託すべし然る時は全癒を早める捷徑なりとす若し此原因療法に由りて治癒せざる者は催眠暗示を原因に向つて爲すべし其他簡便なる

ものは「マニラー」煙草なり更に佳なるは印度大麻煙草の最良品なり之れを吸引すれば發作忽ち緩解する者多し或は硝石紙を焼き之れを吸入せしめるも時には效を奏す

催眠暗示 催眠術は概して間歇時に施すを良とす而して次の如く暗示すべし

發作は爾後決して無きなり喘息は全く忘れたり若し發作の前兆在りし時は左の如く觀念すべし即ち自分は喘息患者にあらざるなりと此觀念を強硬に爲すべし若し從來の經驗に由りし病苦を追想される時は直ちに之を排除し以て倍々自己に執りて有利なる觀念を嵩めるべし然る時は決して發作すること無きなり

從來予の實驗に由れば十の八は全癒するものなり然れ共催眠暗示の微弱又は拙劣等によりて患者發作的自己暗示を構成し以て之れを實現せしむること往々是れあり予の實驗中左の現象を観察せり

患者婦人某毎月二三回劇烈なる喘息發作を將來すること既に八箇年

に涉れり予の治療五回にして輕快し爾後三箇月間發作更に無し患者亦全癒したるものと確信爲せり然るに或日卒然頭痛を發起し醫師を迎へて診療を乞ひたるに其喘息發作なることを診斷せりされど患者は醫師の言を容れず曰く妾の喘息は催眠療法に據りて既に全癒せり喘息發作は既に八年間經驗したるを以て或は醫師よりも知解し居るならん現に斯の如く咳嗽もなく且つ呼吸困難をも感せず從來の經驗に徴するに喘息發作とは聊か思はれざるなり斯くて患者平然たり然れ共醫師が科學的診察の上には歴然なる喘息發作の徴候を顯し居れり即ち打診爲せば肺に空盈音在り聽診せば囉音的騒鳴在り脈搏に呼吸に異常を呈し喘鳴も亦確然たりされど患者は更に病苦を訴へざるに就き醫も亦此現象に喫驚したりとの報告は診療爲したる醫師の許より得たることあり

以上の如く暗示が秩序的且つ強く行はれたる時は譬へ發作を將來せしと雖も患者毫も苦痛を感せず從て其發作たることを氣付かざるな

り斯る經過に倣ふ時は遂に自然良能の佳域に至らしむるや疑ひあらざるなり故に暗示の強弱は無論經過の良否に大關係を有するを以て注意すべきことなりとす

瘧咳

本症は氣道粘膜の疾患にして其主徴は發作性に來たり且つ笛聲を帶ぶる吸息を以て斷續的瘧攣狀咳嗽なり

原因

瘧咳は觸接傳染毒性にして其病毒は患者の咯痰及び呼氣中に存在するものならん然れ共是れ未だ確説に非ず本病の多くは流行性を取るものにして春冬の二期に多し其誘因は概ね感冒或は氣道の加答兒等なり又麻疹は本症の誘因と爲ること往々是れ在り女子は男子に比すれば稍々多し殊に生誕後六箇月より八歳の間に來る大人には極めて稀れなり而して一回此病に罹る時は爾後不感性と爲るを常とす

解剖所見

咽頭喉頭氣管及び氣管枝の粘膜は赤色腫起し屢々強劇

の炎勢を有することあり其炎往々肺組織に連及し加答兒性肺炎を起すを見る多くは肺の一部殊に肺縁に於て氣虛を徵す迷走神經の解剖的變化は確認する所なし

症候

本症の經過を分ちて三期とす

第一期は加答兒期にして通常十日乃至十二日間を持續す而して其症狀は尋常の氣管及び氣管枝加答兒に異なる所なきも終末に近づくに従て咳嗽は漸く發作性となる

第二期瘧攣期此期中は咳嗽發作性に來り往々發作に先だち全身違和恐懼咽喉の痒感等を呈し而して後ち長吸息を爲す是れ瘧攣狀に聲門を狹窄するを以てなり次で無數の衝突性短咳を發し従て笛聲を帶ぶる吸息を爲すの後再び咳嗽頻發し二分乃至五分間を経て大抵水様透明なる粘稠痰を咯出して自ら其發作を緩解せしむるものなり此際往々嘔吐を催進す而して發作中は顔面及び頸部の皮膚に暗赤色を呈し頸靜脈怒脹し口唇の粘膜青色を帶び流涙し屢々氣道結膜鼻腔耳内皮

下等より出血すること有り稀れには大小便を自利す發作間歇時は單純の痙咳に於て全く疾患症候を現はさず即ち咳嗽無く呼吸安靜にして胸部を聽診するに尋常の呼吸音を呈し或は僅少の濕性囉音的騒鳴を聞くのみ發作の數は二十四時間内に十回乃至三十回なりと雖も劇症に於ては五十回に達することあり

發作は晝間よりも夜間に多しとす而して喉頭を壓迫し或は啼泣せしむる等に由りて即ち人工的に之れを誘起せしむるを得るなり該痙攣期は大約四週間持續する後ち次期に轉ず

第三期は即ち減退期とも稱す此時期に於ては咳嗽緩快して痙攣性を呈せず二週乃至三週間を経過せば全く消失す

注意 痙咳より毛細氣管枝炎若しくは加答兒性肺炎を將來することあり是れ懼るべき危険の症候にして多くは合併症に由りて斃る、者あり又久しき年月を閱するの後に肺癆を來すことあり其他往々舌繫帶に潰瘍を生ずるを見る本然純粹なる痙咳は通常熱候なく經過するものとす

熱度大に亢進し呼吸甚だしく困難皮膚青色を呈し脈搏頻數と爲る時は肺炎合併に疑を存すべし

此全經過を算すれば其痙攣期より漸々輕快する者に在りては十週乃至十二週なり

豫後 合併症無き時は佳良なり屢々頑固なる嘔吐の爲め瘦削するを見ることあり

療法 傳染を避け虛弱なる小兒に在りては感冒に注意すべし且つ轉地するを要す已に本症を發するに及びては居室の溫度を平等に保ち發作中は頭を前方に傾け可及的粘痰を拭去すべし而して滋養物は流動の物よりは固形の物を良とす但し發作の止みたる後直ちに與ふるべし

催眠暗示は咳嗽輕快若しくは全癒其他は對症的にすべし但し發作間歇時に施術するを良とす

第貳拾壹章 消化器病

急性胃加答兒

本症は有熱或は無熱の急性症にして食慾缺乏し悪心を起し屢々食後に嘔吐及び胃痛を發し沈鬱及び衰弱の感覺あり是れ胃粘膜の炎症等に基因する者なり

原因

嬰兒より老年に至る迄其素因を稟有する者なり殊に虛弱貧血性の人及び消化不良なる人に於て然り其他感冒に罹る毎に必ず胃加答兒を發する者あり

胃液の變調(發熱時胃の飽充、食物の不良、不消化物、刺戟物、腐敗物)又冷溫度に過ぐる飲食殊に乳兒に於ては乳汁の不良及び酸酵等は其原因の主たるものなり又咀嚼機の不十分なる時は能く此急性症を誘發す大量の酒精飲料も亦其原因と爲る

全身諸病即ち虎列刺、猩紅熱、腸室扶斯、肺癆等に於ても此症を發し易し

特異性としては海老、蛸、海鼠等を食するに由りて之れを來すことあり屢々神経作用に基因すること有り例之憤怒驚愕等に於けるが如し又脊髄癆、尿毒症に發する胃症候は之れに屬す或る時は流行性と爲りて發起することあり

症候

食慾減退し食品を嫌厭し悪心を來し胃部の壓重緊滿、膨脹、感覺過敏、嘔吐、倦怠及び頭痛等は通常見る所の症狀なり

尋常の胃加答兒は不消化に因し初め胸内苦悶、頭痛、精神沈鬱等を發し往々四肢に牽掣の感覺あり而して後胃部膨脹緊滿し之れを壓すれば感覺甚だ過敏なり悪心、流涎、亦胃痛を發す斯くて嘔吐を起し其停滯せる食物を自ら排除す然る時は己から治癒することあり是れ其原因が食物に在りし者に於て然り若し此症狀持續する時は毎回食事に臨んで悪心を來し舌上厚き白苔を帯び甚だしく口渴し大に衰弱の感あり時として心悸亢進、恐怖、呼吸促進、眩暈、頭痛等を發作的に將來すること有り又は不眠、便秘、下痢を起す

其脈常に軟なるも輒く興奮して頻數と爲る熱は概ね缺如す尿は其量減少し且つ濃厚なり若し加答兒十二指腸に連累する時は黄疸を發することあり

有熱性は胃熱に因し神経系の症狀最も強劇なり蓋し嘔吐は多く缺如す熱は多少昇騰し脈搏頻數と爲り舌上厚苔を被むる其狀恰も腸窒扶質の輕症に類似す是れ傳染症狀なるを以て注意すべし其經過は概ね一週間なりとす

中毒性胃炎は砒石酸類亞爾加里類等の如き苛烈の毒物を嚥下するより來るものにして胃部に劇痛を發し必ず嘔吐を將來す嘔吐は時として單に水液を取るも亦之れを誘起す而して精神沈鬱し屢々虚脱症狀を呈す酸類に基因する胃炎に在りては胃壁腐蝕して穿孔を致すことあり又精酒飲料に由りて發する胃炎も是れに屬す

哺乳兒に於ける急性胃加答兒は大抵不良の乳汁に基因するものにして殊に夏期に多しとす

其主たる症候は頻々多量の嘔吐を催し下痢を來す者なり顔面及び四肢は蒼色を帶ぶ熱は缺如し或は僅に亢進すること有り下腹部を壓すれば感覺過敏と爲るが故に多くは疝痛在りて下肢を腹部に牽縮し甚だしく啼泣し時としては全身痙攣を起すことあり(腦水腫様)而して本症は小兒虎列刺とも稱して甚だ危険なるものなり

急性胃加答兒の劇症にして下痢の劇烈なる者も亦同じ

痛風尿毒症脊髄癆に於て時々強劇なる胃加答兒の發作を來すことあり是れ一は血液の異常成分に由り一は直達の神経感動に係ることあり

解剖所見

胃加答兒は常に多く粘液を分泌するものにして屢々亞爾加里性反應を呈す概ね充血を起し加之所々に出血を見る粘膜は腫起して甚だしく皺襞を生ずることあり中毒性に於ては多く腐蝕汚色及び實質損害を見るものなり

豫後

佳良なり然れ共所謂小兒虎列刺及び中毒性に在りては疑は

しきものとす

療法 第一に豫防法を緊要とす即ち其素因を有する者は食物に注意し徐々に飲食し固形物は能く之れを咀嚼し而して常に毛布を以て腹部を纏包すべし

本症の發起するに至りては先づ絶食するか或は少量の流動性食物例之乳汁、肉羹汁、粥汁等を取るを以て最良とす

原因 不良食物の疑ある時は微温湯に食鹽を少々投じ之れを與へ而して咽頭を翼毛若しくば柔軟なる新しき筆にて軽く刺戟すべし然る時は直ちに嘔吐を起すなり

中毒性に在りては吐劑に代るに右の手段を以て最良とす
催眠暗示 對症的に適宜に爲すべし

慢性胃加答兒

原因 本症の素因は往々遺傳なることあり年齢及び男女等には差異少なし又肺癆、腺病、腎炎、麻拉利亞等は其素因と爲る蓋し最初より慢

性症なる者あり或は急性より持續して遂に慢性に至ることあり又慢性加答兒は慢性消化不良の原因なること往々是れあり其他風土の變換することに依りて是れを發することあり

誘因は飲食物の不適當若しくば其多量酒精類の過用、藥劑の濫用等なり

總て胃壁の血行障害を致す者又肺病、慢性腹膜炎等の續發と爲りて發することあり其他常に胃癌及び胃擴張症に於ても亦是れを見る

症候 倦怠、弛緩、蒼白、慘憺の狀貌ありて皮膚の營養不良を徴し其潤澤を失ひ口圍に皺襞を生じ且つ大に瘦削す其動作は怠慢にして頭痛、眩暈を發し精神沈鬱し殆ど依ト昆瑤兒に傾く此等の一般症狀は胃の局處症狀より間々著しきことあり小兒に屢々濕滲を發するを見る毛髮は往々乾涸し爪は破裂を生ず本症には弛緩性と過敏性の兩症あり然れ共其中間に在る者も亦尠なしとせず

弛緩性は胃壁弛緩して其神經傳達不完全にして隨て分泌も亦減少し